
勇者はきっとどこにもいない

七塚稲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者はきつとどこにもいない

【Nコード】

N5155X

【作者名】

七塚稲

【あらすじ】

話の内容に合わせてタイトル改訂しました。

前タイトル：第二の人生（ほのぼの編）

お知らせがある場合は活動報告に乗せる場合が多いかと思えます。

現実世界で死んで、剣と魔法の世界に転成しちゃった高校生。

神様からお詫びに与えられた能力は【アイテムクリエイター魔道具製造】。

おいちよつと待てよ、せめて使い方を教えてくれ！

のんびりした少年が送る異世界生活の行方はどこへ向かう？
ほのぼの目指したどシリアス展開。 現実感高めのファンタジーです。

この作品は主人公チートものではありません。むしろフルボッコ
です。

けっこうな理不尽にあいながらもなんとかそれを乗り越えていく
物語です。

ハーレムものではありません。むしろ恋愛描写があるのか不安に
なっています。

以上を踏まえてお読みください。

更新頻度は不定期ですが、自分にとってはけっこう書きやすい内容
なので案外早めかもしれません。
誤字脱字が見つかったら教えてもらえると嬉しいです。
感想なんか頂けるとかなり喜びます。

現在の更新頻度：2000字程度、毎日。

1話

風邪を引いて寝込んでいた俺は、ようやく昼過ぎに起き出して一階に下りた。

こんなに高熱が出るのは久しぶりで足元が覚束ない。

学校を休んで寝ていたのだが、まだ回復の兆しは見えなかった。

早く薬を飲んでもう一回寝た方がいいな。

両親は共働きだから家にはいないし姉も学校だから、飯の準備は自分でしないとけない。

もの凄くダルいが、飯を食べなければ薬を飲んだところでしんどいだけだ。

俺がふらふらしながらリビングの方へ向かっていると、がらりと玄関の戸が開く音がした。

誰だ？

インターホンも鳴らさず声も掛けずに戸を開けた男は、だらしないスウェット姿だった。

片手には包丁、もう片手はがくがくと震えている。一目でヤバイと分かった。

男はブツブツと何か呟いているが聞き取れない。

『ごめんね、ほんとごめんね。実は貴方、もう死んじゃったんだ』俺が目を開けると、目の前にはそう言って顔の前で手を合わせる女神がいた。

比喩とかそういう話ではなく、女神。

足下に広がる雲の上にまで伸びたブロンドと整った目鼻立ち。豊満な胸を惜しみなく強調する純白の衣装は、ギリシヤとかローマとかそのあたりの格好のようにも見える。

鶏を見たら鳥だなとわかるように、この人は女神なんだなとすんなりと納得するなにかがあった。別に俺はこれまでに神様を見たことがあるとかそういう経験はまったくもってないが、本能に刻まれている情報らしい。

「えっと……」

「いまいち事態を飲み込めていない俺は、目をばちばちとさせるしかなかった。」

『ちょっと死ぬ前の体験がショッキング過ぎるから、記憶は封印しちゃったのよ。あんなの覚えてるまんまだと、これからの生活に差し支えるし』

「どういうことだろう。」

「とりあえず俺が死んだらしいのは、自分の体が半透明だからなんとなく理解できる。分かりやすいな、おい。」

「しかし目の前の女神がこれからの生活と言っているのはどういう意味だ？」

1話（後書き）

いきなり状況が前後していますが、主人公の死亡描写を行うと確実にR20以上になるのでカットです（笑）

この物語は主人公視点の一人称で進んでいくので、基本的に主人公が知らなかったり分からない所は作中でも描写はありません。

そういったところはこの後書き部分で補完していこうと思っています。

面倒かと思いますが、おつき合ってください。

2話

「輪廻転生とか、そういう話ですか？よかったら詳しく説明してもらえませんか」

『ごめんなさいね。貴方はあのキチガイにうつかり殺されちゃったの。』

一応、寿命は80年くらいあった筈なんだけど、途中のイベントですつごく不幸な出目が出ちゃって……、ぶっちゃけるとただの風邪が猟奇殺人まで発展しちゃったの。

『確変みたいなの？』

とんでもない説明だ。

言葉も話し方も親しみやすく分かりやすいから文句をいうべきじゃないのかもしれないが、そんなちよつと困っちゃったみたいなの雰囲気話さないでほしい。

俺の命ってそんなに軽かったのか。

『そんなに暗い顔しないの。仕方ないじゃない、生き物はみんな生まれたら死ぬ運命なんだから。』

一応言い訳しておくかね、世界のシステム的には必要な措置なの。貴方みたいにとんでもないアンラッキーな人がいるから、10人の人がとんでもないラッキーで命をつないでるとでも思ってた頂戴。

恨まないでとは言わないけど、皆にそういうことが起きるって訳じゃないから安心して。それに救済措置もちゃんと用意してるから』

さつきとはうって変わって真剣な顔つきになった女神は、頂垂れた

俺の頭をよしよしと撫でながら優しく言った。

死ぬのは仕方ないとしても、まだ俺なにもやってなかったのになあ。せめて近所のバケツプリンには挑戦しておきたかったなあ。

『大丈夫よ、ちゃんとアフターサービスはばっちりだから』

「……………それってなんですか？」

『これまでの記憶を引き継いで、魂の再誕。貴方がいうところの輪廻転生ってやつだね。』

普通なら魂は炉で一回砕いて他の魂と混ぜて別のものを作るんだけど、貴方みたいに未練たらたらだと可哀想でしょ？予定通りの寿命ならともかく、イレギュラーで終わっちゃったんだから。

つまり、貴方にはこれから第二の人生を歩んでもらいます。まあ魂の価値が上がるから世界レートも上がっちゃうんだけど。

ええとね、分かりやすく言うと、今までとは別の法則が存在する高次元の世界での生活になっちゃうんだ。危険もあるけど楽しいこともいっぱいあるから、そこは我慢してね。

後は前の残った寿命っていう余剰エネルギーがあるから、それを圧縮して特典にしちゃおうってサービスもやってるの。

だから、はい。これ引いてみて』

女神が後ろからひょいっととりだしたのは、立方体の真っ白い箱。上には円形の穴があいている、くじ引きのアレだ。

「なんていうか、もうちょっとこう威厳とかイメージとか大事にしたらいいのに」

『こっちの方が分かりやすいでしょ？』

「まあ確かに」

『派手な演出は幾らでもできるけど、貴方の魂にこれ以上負担をかけたくないのよ』

苦笑する女神を見て、俺は母さんを思い出した。

何となく、この人は本当に神様で俺みたいになちっぽけな人間でも愛しく思ってくれてるんだなあと感じる。

俺は恐る恐る手を伸ばして、中のゴムボールを握った。

【アイテムクリエイター
魔道具製造】

蛍光緑のゴムボールには、そう書かれた紙がセロテープで張り付けられていた。ボールが光を発して、俺の右手に模様が浮かび上がる。これってどういうことですかと聞こうとして顔を上げると、女神はにこやかに手を振っていた。

『じゃあ、頑張っつてね』

3話

俺は周囲をきよろきよろと見回した。

青い空と風に揺れる木々、木製の建物と村の中央にある広場。

村は建物が全部で10件くらいしかない小さい村だ。

俺がこの世界で生まれて、家族と一緒に8年を過ごした山間の村。

どうやら、俺は今ようやく前世の記憶を取り戻したらしい。

これまでにサルナーティスとして過ごした8年分の記憶の上に、前世での俺が入ってきて少しかだけ混乱したが、まあ俺は俺という結論で無理矢理自分を納得させた。

女神とのやりとりがついさっきのように思い出されて、光る右手にはさっきの模様がある。

掌に出た八角の幾何学模様はすぐに消えたが、なくなったわけではないのは感覚としてわかった。

異世界に転生するとは物語の中のような話だが、まあこうやって体験しているのだから事実だ。認めて受け入れるしかない。

百歩譲ってそこは許すとしても、だがこれは明らかに説明不足だろう。

特殊な能力をもらったといっても、それがなんなのか分からなければ使い用がない。

たしか【アイテムクリエイター魔道具製造】と書いていたが、実際にはどうすればいいんだ。

俺が手を握ったり開いたりしていると、家からでてきた大柄なおじさんが俺を不思議そうに眺めた。

「どうした、サナティ。魔法の練習か？」

「あ、父さん」

このよく日焼けしたがっしりした体格のおじさんが、俺の父親だ。焦げ茶色の髪で左頬に傷があつて、かっこいいというよりは穏やかつて性格が顔ににじみ出ている人だ。

父さんは、元は冒険者といつて魔物を倒してお金を稼いでいたよう
で、なにかと腕が立つ。

自慢じゃないがこの村で一番強い。強くて優しい、自慢の父さんだ。
「ねえ父さん、【アイテムクリエイト魔道具製造】ってなに？」

「んー、難しい言葉を知ってるな。でもお前の年じゃあまだ無理だ。
大きくなつたら母さんに教えてもらいなさい」

朗らかに父さんが言つて、俺の頭をわしわしと撫でる。どうやら一
般的な技能らしい。

拍子抜けというか、それつて特典の意味あるのか。もしかして安物
を掴まされた？

だつてボールの色だつて緑だつたしな。なんか普通っぽいし。クジ
で言うなら5等くらいか？

げんなりしていると、父さんはひょいっとな俺を肩車した。

「お前も母さんの子だからな、俺よりずっと魔力がある。そんな膨
れっ面をしてなくてもその内できるようになるよ」

俺の母さんは、魔法使いだ。おっとりした大人しい女性だが、この
村に魔物避けの結界を張っているのは母さんだ。

この世界の俺はサルナーティスという名前で、できちゃった婚を果

たした元冒険者の両親と一緒に暮らしている。

母さん譲りの金髪と、父さんと同じ明るい緑色の瞳。癖の強い髪に俺は毎朝困っているが、父さんも昔はそうだったと教えてくれた。

容姿は正直、自分でいうのもなんだがかなり可愛い部類に入る。

前の世界で言うところの外国の子役モデル並のクオリティだが、別に俺ぐらしいの容姿は珍しいものじゃない。

父さんに街に連れて行ってもらったときはあっちこっちに可愛い子を見つけては見とれていたから、間違いない。この世界の容姿レベルはかなり高い。

まあ今は八歳だからこの先どうなるかは分からないが、俺が男らしいマツチヨを目指すのはやめといった方がいいだろう。

父さんは村の用心棒、兼農家、兼狩人で長剣を使って戦う。弓の腕はへたくそで目も当てられないが、その辺の石ころをぶついたりする方が上手。

罨をしかけるのもかなり上手い。森の狩りには俺は連れて行ってもらえないが、罨を見に行く時だけは一緒に連れて行ってもらえる。

普段は家の畑を耕したり、森で食料をとってきたり、たまに村を襲う魔物を倒したりして収入を得ている。

母さんは白魔法使いで、攻撃系統の魔法は使わないが回復や防御魔法に関してはその道のプロだ。

おっとりしていて何も無い所でよく転ぶが、不思議と物を壊したり薬を零したりはしない。

怒るとかなり恐いと父さんが言っていたが、俺はこれまでに雷を落されたことはないからまだ知らない。

普段は家で薬草を育てたり薬を作ったりして、この村では医者役も担っている。

そんなできた両親に育てられた俺は、けっこう甘やかされていたと思う。村の人たちもかなり優しいし。

俺は思い出した前世の記憶から情報を照らし合わせて、まだこの世界では致命的な失敗をやっていないさそうなことに安堵した。

あんだだけ猫っかわいがりされてたのにつけあがって威張り散らしてない俺、グツジョブ。よく弁えてた。

3話（後書き）

とりあえず3話まで一気に更新しました。

あとはストックがある時は毎日ほそぼそと更新していく予定です。

魔法使いは魔法の得意分野によって色で分類されます。

白 回復、防御、支援

攻撃魔法を一切使えない、サポート専門の職業。

黒 攻撃

強烈な攻撃を使う。多彩さはないが、一撃必殺の魔法が多い。

赤 攻撃

青 防御、カウンター

緑 支援、アイテム生産

同じ内容でも色が分けられているのは、使う魔法が違うからです。

あとは色ごとに術者の性格もけっこう分かります。

赤なら攻撃的、青なら大人しい系といった感じで。

詳しい魔法関係はまた今度で。

4話

「広場にな、今日は行商が来てる。一緒に行くか？」

「うん！」

途中で走ったり飛んだりして俺を驚かそうとする父さんにしがみついていると、広場に到着した。

といっても掲示板があるだけの小さい広場だからそんなに広くはないが、その広場一杯にテントやござのようなものが敷かれています。つもよりずっと賑やかだ。

いつもなら旅芸人のパフォーマンスに飛びついて行くのだが、今日の俺は違った。

露天のアクセサリーに妙なものを見つけたからだ。

俺が背伸びして台の上の商品を見ると、一つのブローチの上に半透明の小窓が見えた。

< 藍玉のタリスマン >

分類：装飾品 種別：精霊石 等級：C

効果：身につけている者のあらゆる防御力を+++する。邪毒、病魔効果を受けつけない。

レシピ：海の精霊石+霜の精霊石+泉の精霊石+銀

薄汚れた深い青色のブローチの上には、そう表示されていた。

値札には500ブラウン二枚と記されていて、うちの晩ご飯で使うお金とだいたい同じだ。

高いのか安いのか分からないから、他の店も見てみることにしよう。

他の露天商を回っても同じような小窓があるものはほとんど見つけれなかった。

唯一大量にあつたのが、魔道具と看板を出している露天商のところだ。

半分くらいは小窓がついていたから、たぶん魔道具の情報だけ見えているのだろう。

しかし半分はパチもんかよ。

あこぎな商売だなと思いつながら本物の値札を見ようとすると、店の主人に怒鳴られた。

「コラッ、糞ガキ！うちの商品に手出したらただじゃおかねえぞ」「ち、違ふもん。値段見ようとしたただけだもん」

野太い声で怒鳴られて反射的に涙がにじんだが、俺はとんでもない言いがかりに慌てた。その拍子にちらつと値段が見えたが、恐ろしく高かった。

5桁って何だよ、誰がこんなもん買うんだ。ぼったくりだろこれ。

「ガキが出せるような値段じゃねえんだよ。さっさと帰んな！」商人の剣幕に押されてよろけた俺を、後ろから支えてくれる手があった。

「おっと危ねえ、また転ぶぞサナティ」

「シュー兄ちゃん」

20代くらいの青年は、村に住む冒険者のマシューだ。

人好きのする笑顔と明るい茶色の髪、身長はけっこう大きい。180cm後半くらいだ。

俺は伸ばした手を引っ込めて後ずさると、急いでその大きな体の後

るに隠れて露天商を伺う。

「やべえ鼻血出る……」

マシューが顔を抑えて上体を屈めた。

片手で頭を撫でてくれているから悪い人ではないんだが、記憶を取り戻した今ではちょっと心配になる。

シヨタコンではないことを祈ろう。

4話（後書き）

この世界にもシヨタコンという言葉があります。

ロリコンその他、特殊な性癖は一通り揃っていると思います。
なにせ貴族が普通にいる世界ですからね！

この間、中世のそういった資料を読む機会があったんですが、
とんでもなくえげつないですね。

ちなみに、マシューお兄さんは無実です。

ただ単に村の子供を可愛がってるだけです。多分。

5話

「アンタそのガキの家族かい?! 汚い手で商品に触らんように言い聞かせてもらわんと、困るよ。こっちだって商売でやってんだからな」

「うちの息子がなにか?」

後ろからぬっと出てきたのは父さんだ。

その手には大きな籠。

なにかと思ったら、中には白いふわふわの鳥がいた。

「コッコ!」

「ほーらサナティ、コッコだぞ。ちゃんとお世話するか?」

「する!」

俺が抱くと一抱えもある鳥は、ベルゼンシャントステップコッコという長つたらしい名前の魔物だ。

しかし魔物といっても人に懐く白系統の魔物で、大人しい性格をしている。

羽はふわふわで手触りが良く、肉も美味しく、卵を毎日2つは生んでくれる優秀な魔物だ。

これまでは食肉用としてしか飼わなかったのだが、どうやらこの鳥はうちに住むみたいだ。籠からコッコを取り出して抱え上げる。

「コッコかわい〜」

ふわふわの真っ白い羽が気持ちよくて、思わず頬ずりする。

コッコも嫌がることなく喉をくるくる鳴らしているのがまた可愛い。

「俺の息子、天使だった……！！」

「破壊力最終魔法級……！」

上で口元を抑えたり小さくガッツポーズをしている大人二人が恐いから、それには気付かない振りをしておく。あれ、もしかしてうちの父さんって親バカ？

周りの人たちもそんなのを微笑ましい感じで見てくれている。

誰か止めるか突っ込むかしてくれ。八歳児にはきついぞこの状況。

「あの……」

店の前ででれでれしだした家族に、露天商が果敢に声をかけた。

その声は恐る恐るといった感じだがよく頑張ったと思う。

だって180cm越えのどう見ても強そうな男二人がでれでれしてるんだからな。

俺には無理だ。

「ああ、うちの息子が何か？」

露天商の方へ向いた父さんに効果音がつくなら、間違いなくキリッだ。

あれ、自慢の父さんだと思ってたんだけど。

ごしごし目を擦ると、珍しくかつこいい父さんがいた。もうなんかどうでもいいや。

「あ、いやいやこれはロンベルトさんのお子さんでしたか。利発そ

うなお坊ちゃんで。どうですか、ロンベルトさんもお一つ。この護符なんかおすすめてですよ」

掌を返したような態度で商人が見せたのは、ウィンドウがないお守りだ。それでも四桁。俺が父さんのズボンを掴んでふるふると頭を振った。

流石に、この場であれが偽物だといわないだけの分別くらいはある。

俺を見下ろした父さんは、分かっているとでもいうようにゆっくり笑って宥めるように俺の頭を撫でた。

「生憎、うちには家内がいますから」

「そ、そうですか」

まあ、明らかにセールストークをする相手を間違えたよな、このおっさん。

ボロが出る前に手を引っ込めたのはさすが商人って感じ。父さんも流石にそこまで追求する気はなかったみたいで、俺の手を引いて家に帰ろうとする。

「待つて、お父さん」

俺は片手にコッコを抱えて片手で父さんの手を引き、最初の露天商のところに戻った。

「お父さん、これ買って」

指差したのは、最初に見つけたブローチだ。

さっきの魔道具の値段を見る限り、どう考えてもこれは破格の安さだろう。

効果がどんなものかまでは分からないが、病気にかからないのはいいことだ。

「ん〜、サナティにはコッコがいるだろ？また今度な」

なにも俺が使うためにほしいんじゃない。

もうすぐ、俺には弟か妹が生まれる。

もうネディという名前も決まってる、母さんのお腹もかなり大きい。生まれてくるその子に持たせておきたいのだ。

なにせこの世界の文明レベルは中世よりまだ少し昔。

乳幼児の死亡率は高いし、その原因の大半は病気と栄養不足。うちの家計的に栄養面は大丈夫だが、病気は分からない。

「ネディにあげるの。……ダメ？」

「……可愛い、鼻血出る」

「あ、あの、よかつたらお坊ちゃんにどうぞ、これ。ただのブローチですから。……やべえ、可愛い。俺、そんな趣味はないのに……」

ともかく、目当てのブローチを手に入れた俺は、一目散に家に帰った。

「ただいま！」

「あらあら、サナティ。おかえりなさい」

椅子に座って編み物をしていた母さんのところに駆け寄る。

「お母さん見て、コッコ！」

「あら可愛い。ちゃんとお世話できるの？」

「大丈夫。もうすぐお兄ちゃんになるんだもん。できるよ！」

「ふふ、よかつたね〜ネディ。貴方のお兄ちゃん、すっごく頼もしいわ」

母さんが優しくお腹を撫でる。俺もそつと膨らんだお腹に手をあてて、話しかける。

「ネデイ、早く一緒に遊ぼうね」

俺はけつこう、いやかなり、幸せな生活を送っていると思う。

優しい両親と村の人たちにかこまれて、食べるものにも困らないし危険もない場所での生活。

村の外には魔物がいたり魔法があつたりする物騒な世界だが、おおむね俺の周囲は平和だった。

5話（後書き）

サブタイトルにある「ほのぼの編」というのは、ここまでで一旦終了です（嘘ですw

次からはすこしへビーな内容が続きますので、主人公がフルボッコにされる展開が苦手な方はお気をつけ下さい。

6話

異変が起きたのは、それから数日後の夜だった。
夜中に頬をつつかれて俺は目を覚ました。

俺を起こしたのは一緒に寝ていたコッコだ。

「ん、なに？」

起きあがると、コッコは窓の外を見ながらぐるぐると小さく鳴いている。
いつもより外が明るい。

当たり前だが、この世界には街灯というものはない。
夜は暗いのが普通だ。なのに今は、炎の赤々とした光が夜空を照らしていた。

「燃えてる……」

俺はあたりを見回して、部屋に誰もいないことに気付いた。
いつも同じベッドで寝ている父さんがいない。

それまでは母さんも一緒に皆で寝ていたが、お腹が大きくなってから母さんは別の部屋で寝ている。

「サナティ、起きて！」

母さんが部屋に飛び込んできた。
不安げに鳴くコッコを抱えていた俺は、普段聞かないような母さん

の大声に驚いて振り返る。

「大丈夫、母さんがいるから恐くないわよ。靴をはいて、マントを着れる?」

「う、うん」

俺は足下の靴を履いて、箆笥の中にある子供用のマントを引っ張り出す。

その間、母さんは荒い息を整えていた。

何が起こっているのか分からないが、非常事態なのは分かる。

しかも、かなりヤバい。

だってこんな事態なのに俺と母さんの傍に父さんがいないなんて、村の危機以外に考えられない。

俺はできるだけ急いで夜着の上からマントを身につけて、父さんが箆笥に押し込んであるへそくりを引っ張り出してポケットに入れた。この状況が結果的になんでもなければ、後で戻したらいい。

ベッドの上のコッコを抱えて、母さんの近くに行って手を握る。

「コッコも連れてっていい?」

「ええ、コッコも一緒よ。大丈夫だから」

母さんの声は、自分に言い聞かせるような感じだった。

裏口から外に出て、森の中に入る。

細い獣道は通ったことのない道だったが、蛍のような精霊達の灯りが足下を照らしてくれるから転ぶようなことはなかった。十分くらい歩いただろうか。

小さな木のうろに俺を座らせて、母さんは俺を抱きしめた。

「ここで待っててね。朝になったら迎えにくるから」

「お、お母さん行かないで」

母さんがゆっくりと木に魔法を施していく。

防寒、身隠し、防御結界。短時間で張れるもの全部だ。

なんで母さんがこんなことをするのか、俺には分からなかった。

だって母さんは妊娠中だ。まともに走ることもだってできないような、大きなお腹なんだ。

もし戻ったとしても戦ったり火事を沈下したりする手伝いなんてできるわけない。

「大丈夫。もし何かあったら、風花亭のグロードンさんを尋ねるのよ。きつと助けてくれるわ」

そんなこと言わないでほしい。

ちゃんと戻ってくるって言うだけでいいのに、どうして街にいる父さんの友達の所へ行けなんて言うんだ。

結界の外で母さんが優しく笑った。俺はぼろぼろ泣いていて、母さんの姿はふやけて見えた。

6話（後書き）

この世界では、基本的に平民は個人で部屋なんて持てるようなよゆうのある経済状況ではありません。普通はでっかいベッドで雑魚寝です。

部屋が分かれても両親、子供達で2部屋くらい。子供に女の子がいれば、女の子はまた別の部屋になります。同性同士で固めるのが普通です。

7話

一通りの魔法を施すと、母さんは踵を返して今来た道に戻って行く。お母さんと呼んだはずの俺の声は、涙と混じって言葉にならなかった。

それから、どれくらいの間が経っただろう。

俺は泣き疲れて寝てしまったみたいで、腕の中のコッコが小さく鳴く声で目を覚ました。

外は明るく、昨日は薄暗くて気味の悪かった森も今はただの森だった。

朝が来たのだ。

けれどあたりを見回しても母さんの姿はない。

日差し具合から見て昼前くらいの筈だが、あたりは静かだ。

「お母さん……」

母さんは朝になったら迎えにくると言っていた。

俺はコッコを抱えてふらふらとろからぬけ出し、村の方に歩いて行った。

なにも考えていなかった。

ただ、父さんと母さんに会いたかった。抱きしめて、もう大丈夫だよと言ってほしかった。

道は一本道だったから、迷わずに村に戻ることができそうだ。なだらかな上り坂を進んで行くに連れて、焦げ臭い嫌な臭いが強くなっていく。

進むのはすごく怖い。でも、それ以上に父さんと母さんに会いたかった。

暖かいコッコをしつかり抱えて歩く速度を速める。

早歩きから段々とスピードは上がっていき、最後には駆け出していた。

自分の家に戻る道が分からなかったから、村の入り口から戻る。

俺は目の前の光景が信じられなかった。

建物は全て焼け、あちこちに赤黒いシミや生物の一部が転がっている。

剣で切られた魔物の死体、爪で割かれた人間の死体、火に焼かれた黒こげの死体。

「なんで……」

明らかに人間と魔物が争った末の結果だったが、俺は思わず呟いていた。

村には結界があった筈だ。母さんが張っていた魔物避けの結界が。魔物は入れないはずなのに、どうしてこんなことになったんだ。

俺は恐る恐る足を進めた。

見当たる限り、死体の中に父さんと母さんはいない。

もしかしたらまだ生きているかも知れない。そんな淡い希望を抱いて。

進んで行く度に、知り合いの死体を見つけることになった。

雑貨屋のマリーおばさん、粉引きのジヨゼフ、農家のハリソン、狩

人のティーチ爺さん。

そんなに人数の多い村ではなかったから、皆知っている。
俺は目に涙をためて進んだ。

ベそをかきながら既に事切れている村人の顔を一人一人確かめながら進んで行って、ようやく父さんを見つけたのは広場だった。

魔物の死体で広場には小山ができていた。その中心に、父さんが立っていた。

父さんにまわりつくようにたくさんの魔物が群がっている。

そのどれもが動かないから、もう死んでいるのだろう。父さんも動かない。

こちらに背を向けているから顔は見えないが、体は血まみれだ。

多分、父さんももう……。

そう考えると、足がすくんで動けなくなった。

7話（後書き）

魔物避けの結界は、石に魔法陣を刻んで配置することで設置できます。

この種類の魔物避けは、石が壊されるか、魔法陣に込められた魔力以上の魔物が来ると機能しなくなります。

8話

そんな俺を狙う影が、崩れた建物の影から現れた。

狼のような魔物はこのあたりでは見かけない種類だ。ぐるると唸る影は三つ。

俺は思わず尻餅をついた。爛々と光る目に睨まれて、がたがた体が震える。

なんで俺は棒かなにかを森で拾ってこなかったのか後悔したがもう遅い。

飛びかかってきた魔物が恐くて俺は咄嗟に目を瞑って体を丸くした。食べられる！

「ギャインツ！」

魔物の鳴き声が聞こえて、俺は恐る恐る目を開けた。

一匹の魔物の腹に短剣が刺さって地面に転がっている。

後ろでどさりと音がして、振り返ると父さんが倒れていた。俺は弾かれたように父さんの元へ走った。

「とうさ、お父さん！」

「サナ……テイ。早く、逃げるんだ」

驚くことに、父さんはまだ生きていた。

とんでもない怪我だが、こうやって喋っているのだからまだ助かるかも知れない。

俺は父さんに抱きついて、わんわん泣いた。

「うええっ、ひっく、ふああっ……」

俺たちの周りを残った二匹の魔物がぐるぐると回って、飛びかかる

隙をうかがっている。

俺は父さんを必死で抱きかかえて動かそうとした。早く父さんを連れて逃げないと。

「無理だ、サナティ。お前だけでも早く……っ」

「やだっ、いやだあ……ふえっ、うっ」

飛びかかってきた魔物から庇うように、父さんは俺を抱えて地面に伏せた。

いつのまにか父さんが抜いていた短剣が魔物の腹を割り、魔物はぎゃんつと鳴いて地面に倒れる。いつもは暖かい父さんの体がやけに冷たくて、また涙があふれた。

残った魔物はどうやら父さんの強さを理解したようで、暫くはうろつろつしていたが今はすぐそこに座ってこちらを伺っている。もう父さんに起きあがる力がないと分かっているのだろう。

「サナティ、ごめんな。こんな駄目な父さんで」

俺はぶんぶんと頭を振った。父さんは強くて優しく、自慢の父さんだ。それは今でも変わっていない。

むしろ、俺は自分の無力さに絶望していた。

「お前だけは、守ってみせる。……大地母神よ。俺の力を全て、息子に」

父さんが掠れた声でそう言うと、胸に刻まれた刺青が光り出した。あれは冒険者が刻んでいる魔法陣だ。魔力を溜めておく機関で、魔物を倒すとそこに魔力が溜まっていく仕組みになっていると聞いた

ことがある。

暖かい光が父さんから俺に伝わってくる。
俺は恐くなって父さんにしがみついた。俺を安心させるように父さんの腕にも力が籠る。

『規定魔力に達しました。』

【アイテムクリエイト 魔道具製造

】の効果を発揮します』

硬質な声が頭の中で響き、俺が着ていたマントが光る。
父さんから溢れた魔力はマントに吸い込まれていった。マントの色が灰色から、父さんの髪の色に似た焦げ茶色に変わる。
父さんは一瞬だけ目を見開いて、いつもみたいに優しく俺を撫でた。

「サナティ、強く生きる……」

その言葉を最後に、父さんは光になって消えた。
俺はもう何がなんだか分からなくて、ぼろぼろ涙を流した。父さんが死んでしまった。それだけは理解していた。
悲しげにふんふん鳴いているコッコを抱きしめて、声を出すのも忘れてただ涙を流した。

呆然としている俺の視界の隅で、のそりと何かが動く。
きゅいとコッコが鳴いて羽をばたつかせた。
忘れかけていた魔物が立ち上がった。

8話（後書き）

この世界は一般的に多神教です。

ギリシャ神話みたいな騒々しいフランクな神様を想像してもらえ
ると一番近いかと思います。

大地母神は三大神に数えられるメジャーな神様ですね。

9話

俺はぐいっと涙を拭って、父さんが使っていた武器の中から短剣を握った。

このままみすみす食べられてやるつもりはない。俺だって父さんの息子だ。

殺されるとしたって、前みたいに無抵抗でやられるつもりなんかない！

コッコを後ろに隠して震えながら魔物を睨みつけると、魔物は大きな口を開けて飛びかかってきた。

俺は避けずに短剣を突き出す。そのとき、俺が身につけていたマントが動いた。

アッパーカットの要領で右袖が勝手に振られ、魔物が吹き飛ばす。

魔物はあたりの死体に激突して動かなくなった。俺はぼかーんとその光景を見ていた。

何だ今の。

俺がなにかしたのか？

マントを恐る恐る引っ張っても、俺を攻撃したりはしない。その代わり、守るように俺を包み込んだ。

「もしかして、父さん？」

俺の呟きに答えを返してくれる人はいない。

それでも、俺はなんとなく分かっていった。父さんが守ってくれたってことが。

マントをじつと見てみると、これまでには表示されなかったウインドウが現れた。

< 庇護の外套 >

分類：装飾品 種別：皮（大地母神の加護） 等級：特殊B

効果：この装備は冒険者と同じように成長し、自律行動で装備者を守る。

この装備が持つスキルは装備者も使える。

レシピ：固有製造ーロンベルト

レベル48、職業：戦士、攻撃範囲：5m、防御範囲：装備者を中心とした10m

戦士系スキルーLV30：

バイタリテイ？（体力増加+++）

アタックブラスト？（攻撃力+++）

ブロッキング？（防御力を一時的に++++）

バーサーク？（攻撃力を一時的に++++魔法攻撃力を-）

ハードウォーク（歩行疲労軽減）

ハイジャンプ（跳躍+5m）

デーパーレスト（睡眠時回復量増加++）

グルメ（飲食時回復量増加+）

スラッシュ（前方横攻撃、範囲3m、三回まで連続可能）

アイアンラッシュ？（前方範囲5m内に攻撃、50発×3回）

スタンディップ（前方下攻撃、打ち上げ）

フリードセバー（前方上攻撃、切り落とし）
キーンエッジ（前方に衝撃波、距離10m）
アンダーブレイド（前後に地面を伝った衝撃波、距離5m）
フルスイング（周囲に竜巻を起こして攻撃、距離3m）
リフレクト？（遠距離攻撃を相手に打ち返す）
チャージ（次に行うスキルの威力を二倍にする、発動時間2秒）

魔法戦士系スキルLv10：
コンセントレイト？（魔法威力を一時的に+++）
マジックブレイド？（武器に魔法スキルを付与、効果1分）

フレイムエッジ（火魔法攻撃、距離5m、対象単体、威力B+、単
発炎上）
アイスバーン（水魔法攻撃、距離10m、対象範囲、威力B、凍結）
スラストウィンド（風魔法攻撃、距離30m、対象単体、威力A、
三回攻撃）
アースグレイブ（土魔法攻撃、距離15m、対象範囲、威力A+、
追跡）
レイボウ（光魔法攻撃、距離15m、対象単体、威力B、単発麻痺）
ダークストーム（闇魔法攻撃、距離20m、対象範囲、威力A、吸
引多段）

狩人系スキルLv3：
アグレッッシブセンス？（感知能力増加++）
ラビットフット（移動痕跡減少）

冒険者スキルLv6：

バックパック？（アイテムを重量関係なく20種類まで個数上限なしで所持できる）

サーチエリア（周辺地図を記憶）

データビジョン？（Cランク以下の人物と魔物、アイテムの情報を表示する。）

かつてない情報量に目の前がくらっとした。

詳しく読むのはあとにして、今はこの場を離れる方が先だ。さっきみたいに魔物が集まってきたらたまったもんじゃない。

俺は恐る恐る立ち上がった。

9 話（後書き）

等級^{ランク}について

アイテムには入手のしにくさ＝魔力含有量の高さによって、等級が
ついていきます。

アイテムの種別によって値段は変わってきますが等級が上がる程効
果になります。

高

A（一級メジャー）

a（一級マイナー）

貴族、王族が持つレベルの道具や武具。

特殊な固有スキルを持っている物が多く、ほとんどが一点もの。

B（二級メジャー）

b（二級マイナー）

騎士など高位の軍人が持てるレベルの武具。

魔法の効果やスキル効果が付いた武器が多く、装備者のステータス
も上がる。

C（三級メジャー）

c（三級マイナー）

一流の冒険者が所持していてもおかしくない、上等な武具。

この段階で既に平民の年収以上の額が飛ぶ。

D（四級メジャー）

d（四級マイナー）

冒険者や神官、狩人達が使う上等な武具。

このレベルのアイテムを買えるようになると一人前。

ある程度稼げているという目安になる。

E (五級メジャー)

e (五級マイナー)

作物や魚、家畜の肉など、平民でも用意に手にできるアイテム。そこそこの値はするが、ちょっと奮発すれば出せる程度。

F (範囲外)

日用品、もしくはそれ以下の価値のない物品。
低

A以上のアイテムもあるようですが、そんなものはお伽噺の中だけだと言われています。

10話

俺は父さんの短剣を腰に刺して、長剣を持ち上げようとした。

これは父さんの形見だから持っていきたい。しかし重くて引きずることもできない。

大人ならなんとか持ち上げられるかもしれないが、八歳児には無理だ。

途方にくれていると、マントがつるんと剣を覆って中に持っていたってしまった。

そういえばバックパックというスキルに、重量関係なく荷物を持ち運べると書いてあった。

原理はよく分からないが、とりあえず持っていけるなら文句はない。

俺は物陰に隠れるようにして、母さんを捜した。全部の死体を確認したが母さんはいなかった。

母さんの他にもいなくなっている人がいた。

牧場のレナさんとマディも見つからなかった。

みんな、若い女の人だ。攫っていった理由なんて考えるまでもない。

かたかたと俺の体は震えた。

これは恐怖じゃない、怒りだ。

今から追いかければまにあうだろうか。母さんを救えるだろうか。

腕の中でコッコが心配げにきゅーと泣いた。

それで俺ははつと我に返り、自嘲した。

ついさつき狼のような魔物スレイウルフにさえ殺されかけた俺に、
一体何ができるんだ。

スレイウルフは駆け出しの冒険者でさえ倒せる、かなり弱い魔物だ。

村を襲った魔物をぶち殺したいという暗い願望と、その力がない苛
立、そしてまだ八歳なのだから仕方がないという諦めが、俺の中で
喧嘩を始める。仕方ない、そう分かっていても割り切れるものじゃ
ない。

俺達の生活をめちゃくちゃにした奴らをぶつ殺したい。でも今のま
まじゃあ力が足りない。

このまま泣き寝入りするなんてまっぴらご免だ。

考えて考えて妥協して俺が出した結論は、早く大きくなって強くな
ってから魔物を倒すというものだった。

「ごめん、父さん母さん。俺、絶対強くなるから」

俺はコッコを抱えて村の外へ歩き出そうとして、その前に一件の家
に寄ることにした。

色んなものが転がっていて歩きにくい道をなんとか通って辿り着い
たのは、村唯一の道具屋であるマリーおばさんのうちだ。

建物は半分くらい焼け崩れていても、店の商品は少しだけ無事だっ
た。

食料品は荒らされて持っていかれた後があったが俺が欲しいものは
残っていた。

袋と水筒だ。

食料も薬草も森を歩いて拾えば良いが、それを入れるものがなければ持ち運べない。

俺は大きい袋から小さい袋まで使えそうなものを全部集めて、一纏めにした。

水筒は子供用より少しだけ大きいものをもらう。

火事場泥棒のようで気が引けるが、このまま置いておいても朽ちていくだけだからと割り切って手を動かす。

『おつかいかい？えらいねえ、サナティ』

恰幅のいいマリーおばさんを思い出して、また涙がにじんだ。よくこれだけ泣いていて涙が干れないものだと思うが、涙は後から後から湧いてきた。

荷物をまとめて、大きな袋いっぱい小さな袋を詰め込む。水筒は紐がついていたから肩からかけた。井戸で水を組んでいこうかと思つたが、中に大きな魔物が落ちて死んでいたから使えなかった。

俺はまず、村から一番近くにある沢を目指して歩いた。

一時間もしないうちに岩の隙間から湧き水が流れている沢に着く。いつもならもつと時間もかかるし疲れるのだが、今日は楽々歩くことができた。マントの効果だろうか。

俺はコッコを下ろして水筒に水をくんだ。

コッコは岩に生えた苔をついばんで食べている。

水を一口飲んでからからの喉を潤すと、俺も朝から何も食べてなかったことを思い出した。

ぐーっとお腹が鳴ると、コッコがこっちを振り向いた。

「俺もお腹減ったな」

10話（後書き）

魔物が人間を襲う理由の多くは食料の略奪です。盗賊とあんまり変わりません。

一般的には人間を食べる目的では村は襲いません。リスクが大きくなりあまり美味しくないからです。

11話

あたりを見回すと、淡いピンク色の木の実がなつた木が見つかった。あれは確か食べられる筈だ。教えてくれた父さんの声を思い出す。

『あの木の実を食べれるぞ。木に登るより、軸に石を当てて落すんだ。』

当たって落ちないのはまだ若いやつだから食べられない。熟れ過ぎたやつは落ちてつぶれちまうが、中に虫がいるからこれも食べられないから仕方ない。

それでも種は取って乾燥させておくと火種になるぞ』

俺は足下の小石を拾って、木の実を落した。

これまでに父さんと村の外に出る時に投げ方のコツも教えてもらったから、大抵的には当てられる。俺は食べられる実を五つ確保した。

岩の上に腰を下ろして、甘酸っぱい実をしゃくしゃく食べる。

口の周りが果汁で汚れたから沢の水で顔を洗った。

『口回りべたべただぞ。ほら、こっちおいで』

優しく口の周りを拭ってくれた父さんを思い出して、俺は涙を飲み込んだ。

他にも食べられそうな木の実や根っこを集めては袋に入れて、蒸し焼きに使えるような葉っぱをまとめて袋に入れて、味付けに使える香草をまとめて袋に入れた。

そろそろ出発しようと思ってコッコを探すと、いつのまにかいなくなっていた。

俺は慌てたが、すぐにケーンと鳴き声が聞こえてきた。コッコが俺を呼ぶ時の声だ。

「どっこ、コッコ?」

鳴き声が聞こえた方の草を分けて進むと、コッコは別の魔物と一緒にいた。

茶色い毛皮を持ったヤギのような魔物、グレイトホーンだ。

コッコよりすこし大きいくらいで角もないから、まだ子供なんだろう。

真っ黒い大きな目がこっちを見ていて、すごく可愛い。

人間に害を及ぼさない白系の魔物は退治しなくてはいけないわけではない。家畜として飼う人間も多い。グレイトホーンの性格は大人しくて臆病、ただし怒らせると怖い。

俺が座っている子ヤギに手を伸ばすと、体をびくつと振るわせた。

「お前、怪我してるのか。ちょっと待ってるよ」

俺はコッコにそこで待っているように言って、さっきの沢へ戻った。たしか、薬になる草が生えていたはずだ。

『ポーションはね、トーンの葉っぱとラットの実をすりつぶして作るの。』

ポウルを持ってない時は、窪み石をつかったら良いわ。その辺りに落ちてるから、よく水で洗って使うのよ。』

街へ出るまでの旅の途中で教えてくれた、母さんの声を思い出して必要な材料を集める。

トーンの葉っぱは水場によく生えている長い草、ラットの実は南天みたいな赤い粒だ。

どっちも足下に生えているものだから、俺でも集められた。

軽くてポウルみたいにへこんでいる窪み石は、沢の近くに落ちていた。

分量は2：1で、手頃な石を拾ってすり潰して混ぜる。

「うん、これでいいや」

最初は緑と赤だった窪みの中身が、混ぜていると白っぽくなって粘り気が出た。

「ちよっとお水を足して、完成」

そのままでは粘性が弱いので、水を足して粘りを強くする。

慎重に水を混ぜて、ボンドくらいの粘り気になるまで混ぜる。

飲料用ならもつと水で薄めないといけないが、傷口に塗るならこのくらい粘り気があってもいい。

薄めると効果は落ちるから、ポーションは飲まずにできるだけつける方がいいのだ。

11話（後書き）

木の実を取るのもポーシヨンを作るのも、どっちも子供の仕事です。両親の職業によって子供の仕事も変わってきます。

他に畑の手伝いやお使い、簡単な薬の内職なんかが仕事でした。

サナティはまだ八歳ですが、そろそろ親の手伝いを覚え出したころだったようです。

12話

俺は途中で包帯代わりになるオオバの葉をとって二匹のところへ戻った。

子ヤギはぐったりと寝転がっていて、俺はちょっと慌てた。早く手当した方が良さそうだ。

「ごめんな、触るよ」

血がにじんでいる前足にポーションをたっぷり塗って、オオバの葉で巻いたら終わりだ。

俺はもう一度沢に戻って、窪み石に水を汲んできた。

「飲める？」

子ヤギはクーと鳴くだけで、口をつけない。舌を出しているから喉は乾いているはずなんだけど。

とことこと近づいてきたコッコが水を飲んだ。

お前に持ってきたんじゃないんだけどな。

その姿をじっと見ていた子ヤギが恐る恐る水を舐めた。良かった……。

「食べるかな？」

木の実の残りを取り出して子ヤギの方へ差し出すと、ふんふんと臭いを嗅いで興味を示した。

ブルーンの実のように肉厚の実はそのままでは食べにくそうだから、細かく千切って口元に持つていく。子ヤギはべろりと実を食べて、大きく尻尾を振った。

「わわ、俺の手まで食べるなよ」

残りの二つとも剥いてやると、子ヤギは喜んで食べて寝転がった。「じっとしてたら、夕方には治るからな」

子ヤギを撫でて、俺はそろそろ出発しようとした。

街までは大人でも一日かかる。俺の足なら三日はみておいた方が良いだらう。

野宿は避けられないから、日が暮れるまでに寢床を探さないと危険だ。

そんなとき、がさりと背後で音がしてぶるんという鳴き声が聞こえた。

恐る恐る振り返ると、そこには父さんよりも大きいグレイトホーンがいた。親だ。

立派な土色の角が凶器に見える。

半開きの口からはふしゅーと息が漏れている。

俺はびびって尻餅をついた。逃げ出そうにも腰が抜けて動けない。

「う、ごめんなさい……。食べないから食べないで！」

マントにくるまって小さくなり、俺はぶるぶる震えていた。

しばらくしてそっと目を開けると、親ヤギは子ヤギの傍に座ってペるペる舐めている。

親子がなにやらフンフンと話しているところに、おもむるに「コッコがとことこ近づいていった。
馬鹿、お前なんか踊り食いされるぞ！」

しかしコッコが食べられることはなく、なにやら三匹で話します。最初はいきなりのことで驚いたが、どうやら親ヤギに敵意はないみたいだ。

「じゃ、じゃあ俺はこれで……ひゃあ！」

コッコを抱えて後ずさりしようとした俺の顔を、べろりと親ヤギが舐めた。

親ヤギはもう一度すっ転んだ俺の首の後ろをくわえて、猫が子供を連れて行くみたいに持ち上げた。

「え？え？どこ行くの！？」

よろよろと立ち上がった子ヤギが後から着いてくる。

親ヤギはスピードをあげるとはしないが、人では通れないような崖を軽やかに降りていく。

「うわ、うわっ無理だった。怖い、落ちる……！」

普段は絶対に近づいてはいけないと言われていた溪谷をヤギ達は降りていく。

見てはいけないと思ったのだが、つい足下を見て俺は気絶した。

12話(後書き)

ちなみに、グレイトホーンは雑食です。肉もそこそこ食べます。

13話

「む、ふにゃ」

俺は暖かいものに包まれて目を覚ました。目の前にはふかふかの毛皮。

びっくりして飛び起きると、俺の傍で寝ていた子ヤギとコッコが転がっていく。

「わあ、ごめん！」

二匹を抱えて座ると、どうやらここは洞窟みたいだった。

入り口の外はもう真っ赤で日暮れの間になっていた。また俺のお腹がくるつと鳴る。

体内時計はそう変わるものじゃないから、仕方ないんだよ。

朝は日の出と一緒に、お昼は軽く、夜は日暮れと一緒に。それがこの世界の村人の食事時間だ。

きゅうきゅう鳴くコッコが、俺に生んだ卵があるのを教えてくれた。他のグレートホーンに触らないように気をつけながら、洞窟の隅の柔らかい場所に落ちている卵を二つ手に取る。

俺は森で取った果物を葉っぱで包み、イモと卵を取り出して柔らかい土の中に埋めた。

あとは魔法の準備だ。少し寒くなってきたから、暖かいものが食べ
たかった。

俺は両手を何回か擦って魔力を手に集めて、小さな砂山の上に手を
かざす。

この世界で魔法というのは、イメージがしっかりしていて魔力さえ
あれば誰でも使える。

俺が今イメージしているのは、この砂山をちよつとだけ暖めてでき
る蒸し料理のことだ。
地熱を使って砂山を暖めて、全部の熱変質が半分くらい起きたあた
りで止めてほしい。

「ゆつくり暖めてね。Steam（蒸し焼き）、200度、30c
ount」

決まった呪文はいらないが、イメージが具体的に言葉になるのなら、
ある方が上手くいく。

手から魔力が離れて砂山が暖かくなり出したから、俺は適当な棒を
探して洞窟内を歩いた。

洞窟はかなり大きくて、入り口から奥まで50mくらい。
横幅はあの大きな親ヤギが二匹は寝転がれそうだから、多分10m
はある。

奥には細い道が幾つか伸びていたが、迷うといけないからそつちに
は行かなかった。

入り口の方へ行くと、足下に絶景が広がっていた。

「すごい……！」

あたりの岩肌は夕日で真っ赤に照らし出されている。足下に広がるのは広い森と草原。

その先に、俺が目指している街が見えた。この分なら明日には着けそうさ。

この岩棚から降りられればの話だけど……。

俺は気を取り直して棒を探した。

砂を崩すための道具がないとやけどしてしまう。

入り口を出ると高原植物が生えていた。夏の終わりに咲く高価な薬になる幾つもの花が山ほどあつて、俺はかなり驚いた。

いやいや、俺は花がほしかったんじゃないし。

岩の端から生えていた枯れ木の枝を一本もらう。

洞窟の奥に戻ろうとして、俺は躊躇いながらも袋を取り出した。

母さんが教えてくれた植生に気をつけながら、生え過ぎている部分の花を摘んで袋に詰める。

俺が取ったことで残りの花が枯れてしまわないように気をつけながら。

俺は今、身寄りがない状態だ。

街のグローデンさんはいい人だが、俺がこの世界で成人と認められる十五歳まであと七年ある。

お金は、できるだけあつた方が良さそう。

確実にお金になると分かっているのに持っていくのは気が引けるが、街に出て生きていくためだ。

仕方ないと割り切って、俺は丁寧に花を摘んだ。

あと、洞窟に転がっている石も袋に入れられるだけ詰めた。

見た目は普通の石だが、魔力を感じたから試しに魔法で割ってみるとこれが精霊石だと分かった。

これは前の世界で言う石油みたいな天然資源だ。

石油と違うところは、精霊石の方がずっとコストパフォーマンスがよいということ。

再利用ができて、摩耗度は僅かというかなり便利な資源だ。

その使用方法はまだ確立されていないが、これも高価なものに変わりはしない。

俺の拳くらいまでの大きさの精霊石を集めて、袋に入れた。

種類は土と風と木と岩が多くて、たまに火と光。

複数の属性が集まっているから、ここはあたりの魔力が集まる場所なんだろう。

13話（後書き）

< 属性について >

この世界で一般的に知られている属性は主に八つです。

火：炎を燃やしたり、あつたかくする

水：水を出したり、冷やす

土：地面を動かしたり、強化する

風：風を起こしたり速度を上げる

光：光を生む、動かす

影：影を作る、動かす

力：魔力をそのまま操る、純粹エネルギー

育：ものを育てたり、物を生み出す

これらは私たちの世界で言うと、元素記号の良く使う分野のことです。

魔法使い以上になると元素分子の単位で認識するので、もっと属性は増えます。

あくまでも一般的なものが八種類というだけです。

14話

全部をバツクバツクに入れて戻ると、ちょうど良く砂山から湯気が出ていい匂いがしていた。

俺はよく匂いを嗅いで、料理ができていることを確認してから砂山を崩す。

この世界では温度計もタイマーもないから、料理の善し悪しでは匂いが一番重要だ。

砂山から出てきたのは焼き芋と温泉卵と果物ソース。焼き芋はサツマイモとジャガイモの間くらいのちよっと甘いご飯用の芋だから、ソースを着けて食べると美味しい。

匂いにつられて寄ってきたコッコと子ヤギに芋を少し分けてやって、俺はもそもそと食事をした。

食べ終わってトイレらしい砂山で用を足して、俺はコッコを抱えて親ヤギのもとへ戻った。

子ヤギもとことと後ろを着いてくる。

周りのグレイトホーン達はもう寝転がってくつろいでいたから、俺も同じように親ヤギの近くに座る。

このまま今日はもう寝るのかなと思っていたら、きゅーつとコッコが鳴いて親ヤギが立ち上がった。さっきみたいに俺のマントをくわえてのしと洞窟の入り口へと向かっている。

「なに?どしたの?」

俺が慌てていると、子ヤギがちょっと悲しそうに声でけーんと鳴いた。まるでお別れを言ってるみたいだ。よちよち歩いてきたコッコが親ヤギの背中に乗る。

「うわあっ……！」

親ヤギはポーンと入り口から飛び出して、すごい勢いで日暮れの山を駆け下り出した。

俺はもう恐くて漏らすかと思った。さっきトイレにいつてなかったら確実にアウトだった。

親ヤギのスピードは、この世界じゃまず人間が体感できないスピードだ。

多分時速30kmくらいだが、車の30kmとヤギの30kmじゃあ話が違う。

生身だし、斜面だし、飛んでるし！

俺だって絶叫系は嫌いじゃなかったが、あれは安全が確保されているから平気なわけであって、何が言いたいかというと、これは無理。5分もしないうちに親ヤギは断崖絶壁を駆け下りて、足下に広がる森の水場を駆け下りた。

洞窟から街までかかった時間は、30分くらいだったと思う。

森を出て街の城壁まで後少しというところで、親ヤギはくわえていた俺を放した。

「っ、連れてきてくれて……ありがとうな」

まだ膝ががくがく震えているが、俺はなんとかお礼を言った。すると親ヤギは地面を蹄で引っ掻いて頭を下げ、こちらに角を向けてきた。

これは攻撃行動じゃなくて親愛の儀式だ。

俺は母さんから教えてもらったことを思い出して、両手を擦って魔力を集めた。

親ヤギの角に手を当てると、俺の魔力が親ヤギに伝わって親ヤギの魔力が俺に伝わる。

これは魔力折衝といって、異種族同士で行う友好の儀式だ。

言葉が通じなくても魔力で分かるから、また会う時に相手を間違えずにすむという効果がある。

俺からしたらグレイトホーンはみんな同じ顔をしているし、むこうも人間なんてみんな同じに見えるだろう。

『人の子よ、我が息子を助けてくれた礼は返したぞ』

「……うん、ありがとう。貴方達に大地母神の加護がありますように」

『山で困り事があれば呼ぶといい。力になろう』

コッコを背中から下ろして親ヤギは帰っていった。

戻っていく親ヤギのスピードはここまで来た以上の速度だったから、まださっきのでも加減してくれてたんだなと分かった。

とんでもねえな、グレイトホーン。

念話で話しかけられてかなりびっくりしたが、まああれだけ立派なグレイトホーンならある程度魔法を使ってもおかしくはないかな。

基本的にグレイトホーンは魔法を使う種族ではないが、何事にも例外はある。

種族の中でも力が強かったり長く生きている魔物は自然と魔法の使い方を覚えている事があるらしい。

14話(後書き)

ヤギの出番はここまです(笑)

15話

俺はなんとか立ち上がって、コッコを抱いて街門へと向かった。

大きな外壁がそびえている曲剣ファルカタの街は、この地方で一番大きな街だ。大陸北西にあたるここ、山と森のケルト地方の実りが集められて、各都市へと送り出される貿易街でもある。

外壁の周りには幾つものテントがあつて、皆もう火を焚いてご飯を食べていた。

これは入場審査の順番待ちをしている人たちだ。そこで俺ははつとして、鞆の中を探った。

街に入るには入場券がいる。

立場によって見せるものは違うが、身分証明書を出さないと中に入れてもらえないのだ。

俺はまだ未成年だから自分のものはないが、保護者の身分証があれば入る事はできる。

俺は鞆の中から、父さんのへそくりを取り出した。

小袋の中には宝石と研磨された精霊石が幾つかと、一枚だけ金属板が入っていた。

あつた。

俺は胸を撫で下ろした。

金属板は父さんのギルドカードだ。そういえば普段は使わないからと言って、へそくりと一緒に入れていたのを思い出した。

そこにはロンベルトー死亡と書かれていて、俺はまた滲んできた涙をマントで拭って急いで緊急通用門を目指した。

大門は四つある。

北と南に一般市民の門、東に商人用の大口門、西に俺みたいに山間に住んでる地方民の門。

その間に冒険者と軍人が使える緊急通用門がある。

大門は日暮れと一緒に閉まってしまいが、緊急通用門は夜でも開いている。

どうせギルドカードを使うのだから、門外の宿で一泊するよりも早く中に入ってしまった方が安全だ。

街外は治安がかなり悪いから、人さらいや泥棒が怖い。

八歳児が一人で歩いているなんていいカモだ。

俺はコッコをマントの中に隠して、走って緊急通用門を目指した。

俺が緊急通用門へ向かっていくと、周囲からの視線がばんばん突き刺さる。

大抵は興味なさそうにすぐに逸らされるが、幾つか俺を追ってくる影がある。

人攫いは単純に怖い。

奴隷にされるか魔法の実験体にされるか、ともかく捕まったら最後、まともな人生は吹き飛んでしまう。

俺が足を速めると、ついてきた人間もそれ以上は追ってこなかった。

多分、俺が追い返されると思っているからだ。衛兵の元へ向かっている人間を捕まえるより、衛兵の所から追い出された人間を捕まえる方がずっと楽だからね。

俺は何事もなく人の間を縫って進み、緊急通用門へと辿り着いた。生死に関わらない事態のノックは四回。門が開けられる音がして扉が開く。

「……どうした、坊主？ここは緊急通用門っていつてな、普通の子は入れないんだぞ」

「分かってます。俺の父さんは、冒険者です」

俺は焦らないようにゆっくり言って、ギルドカードを若い衛兵さんに見せた。

若いつて言っても20代くらいだから俺よりはずっと年上なんだけど。

「風降り花咲く木蓮亭の、グローデンさんに会いたいです。通っていいですか？」

俺が小首を傾げて尋ねると、衛兵さんは慌てて俺を中に通した。

「ちょっとそこに座って待っててな」

門の中は空港の手荷物検査みたいな場所になっていた。ただし勿論木造だが。

衛兵さんは俺を椅子に座らせて他の人たちの所へ駆け寄った。

16話

「先輩！これ見てください！！」

「なんだ、また偽造か？多いんだよな最近」

「違います、魔剣士ロンベルトのカードなんですこれ！しかも死亡になってます！！」

「なにっ！？本物か？」

「確認します」

衛兵は光の精霊石をカードにあてて、本物かどうか確認する作業に移った。

ギルドカードにはそのままでは見えない魔法陣が特殊な粉で書かれている。

「お前、馬準備しとけ。本当なら洒落にならん」

三人の中で一番年上の衛兵さんがもう一人に言つと、30代前半くらいの衛兵さんは急いで外に飛び出していった。

光の精霊石の魔力を受けて、ギルドカードが青白い光を出す。

若い衛兵さんは凄く悲しそうな顔をした。

「本物です。継承済みですから、間違いありません」

年配の衛兵さんはすぐに紙にペンを走らせて、戻ってきた衛兵さんに渡した。

受け取った衛兵さんは取って返してそのまま外へと走っていく。

「おい、この事は他言無用だ。いいな。交代要員が来るまで緊急時以外門は開けるな。ここは任せるぞ」

「了解しました！」

ぴつと気をつけをして、若い衛兵さんが左胸を拳で叩いた。年配の衛兵さんが俺の方にやってくる。

「坊主、風花亭まではちゃんとおじさんが連れてってやる。約束する。その前にちょっと話をきかせてもらいたいから、冒険者ギルドに寄るぞ」

有無を言わせない口調だが軍人さんは大半がこんな感じだし、このおじさんはまだ優しい方だ。

座ってる俺にしゃがんで目を合わせてくれている。

「俺はウイストーン・シエネだ。坊主は自分の登録名は言えるか？」

「……サルナーティス・デイン」

この世界では名字というのは、市民では街に住んでいる人以上の身分でしか持てない。

ただし、冒険者は別だ。この衛兵さんもそのどちらかなんだろう。

俺も本当なら名乗る名字はない筈だが、さっき若い衛兵さんが継承と言っていたから思い出した。

俺は、父さんの力をもらった。

落ち着いて思い出したら分かるのだが、父さんが死ぬ前にした祈りは、父さんがこれまで冒険者として蓄えた力を俺に渡すための継承の儀式だった。

継承の儀式で受け取るものは、相手の能力と職業、そして魔名だ。冒険者はこれを名字として使っている。

父さんの魔名は純銀^{デイン}。

俺はこれから、父さんの名前と一緒に生きていく。

「おりこうさんだな。賢い坊主にはご褒美だ」

ウイストンはぐしゃぐしゃと俺の頭を撫でて、ポケットから干し芋を取り出して俺に差し出した。

受け取るうとして、俺はコッコを抱いていたことを思い出す。

ギルドカードの免税は本人にしか適用されないため、コッコには別に通行税がかかってしまう。

俺は今お金を持っていないから、最悪、コッコをとりあげられるかもしれない。そんなのは嫌だ。

俺はすっかりコッコを抱き直した。

「ん、なんだ？ なにかいるのか」

マントに手をかけられて俺は後ずさったが、ウイストンはちらっと中を見て考え込んだ。

「……………一緒に入っちゃだめですか？」

「そうだなあ、コッコは街中じゃあ食用としかみられないからなあ。

……………坊主がしっかり抱えてるならいいよ。できるか？」

「はい」

俺は何回も頷いた。だって、俺に残された家族はもうコッコしかい

ないんだ。一人なんて耐えられない。

「よし、おいで。行こう」

ウイストンが俺を椅子から抱き上げた。その姿を見て、若い衛兵さんがはっとして声を掛ける。

「先輩、シヨタコンは犯罪ですっ！」

「……ふざけんな手前、滅俸するぞ！」

16話（後書き）

基本的に、冒険者は街や関所、砦の通行時には通行税がいりません。依頼は街の外に出ないと達成できないものが多いので、通行税は冒険者ギルドが一年分をまとめて軍に払っています。

ただし、持ち込む商品や動物、奴隷に関してはその限りではありません。そうでないと商人ギルドの商売が上がったりになってしまうので。

17話

薄暗い、石畳が続く道をウイストーンが俺を抱えて歩いていく。普段は賑わいを見せている通りだが、日の暮れた今は歩いている人もまばらだ。

冒険者ギルドは街の南にある。東一帯に広がる商業区の西側、中央広場からすぐ東に行った場所だ。となりには商業ギルドがある。一度父さんに着いてきた時に寄ったから場所は覚えていた。

街は中央広場から四方向に分けて、大きく四つの区画に分かれる。軍の駐屯地と冒険者の宿がある西の防衛区、商店と市場が軒を連ねる東の商業区、民家が建ち並ぶ南区、上流階級の人たちが生活する北区。この四つだ。

ギルドまでは大人の足で歩いても一時間かかった。その間、俺はじっと黙ってウイストーンに抱えられていた。喋る元気がなかったと言ってもいい。今日はいろんなことがありすぎて、俺は心底疲れていた。正直に言うтусぐにでもベッドにもぐりこんで眠りたかった。

でもなぜか俺の目は冴えていて、道ゆく人をウイストーンに抱かれたままずっと眺めていた。

ちりちりと胃の中を焦がすような感覚。苦しくて気持ち悪くて、俺はコッコを抱え直した。

のんびりといつてもいいくらいのペースでウイストンが冒険者ギルドに着く頃にはすっかり日も暮れていて、あたりの店は雨戸を閉めている状態だった。完全な店仕舞いだ。

丁度、暮れ六つの鐘が鳴り、夜が来たことを市民に知らせる。ここからは夜の商売の時間だ。

商業区が一斉に灯りを点し、昼とは別の看板が掛けられる。

そんな光景を横目に俺たちは細道に入り、冒険者ギルドの裏口から中に入った。

「北西門警備部隊長、ウイストン・シエネ。参考人サルナーティス・デインを連れてきた」

「こ、こちらへどうぞ！」

三回のノックに慌てた職員が、急いで鍵を開けて俺たちを中に入れる。中は大騒ぎになっていた。

ギルドの一階は大広間になっていて、たくさんのカウンターと待ち合い用のテーブルが置いてあるだっ広い場所だ。100人くらいなら十分座れる広さがある。

そこに今は人が溢れていて、皆が慌ただしくあちこちを這ったりこちこちにいったりしながら指示をもらったり飛ばしたり。人が多すぎて普通に話したんじゃあ聞こえないから、怒鳴り合いになっている。

「Cランク以上の冒険者も手配しろ！数が足りん」

「第一陣Eランク以上5パーティー、出発できます！」

「さっさと行け！馬はギルドで持つ、衛兵蹴り飛ばしてでも人数分かつぱらってこい！乗れん奴らは後続に回すぞ」

「商業ギルドから伝令です、緊急納品書が回ってきてます」

「ありつたけ持つてこさせろ！ギルドで一旦全て買い上げる。どうせ足りん、追加受注忘れんなよ！！」

「持ち出し金が必要な方はこちらへ！窓口は三つ、明細の提示をお願いします」

「金貸しを叩き起こせ！輜重隊を編制して第二陣にくつつける、朝一で市場を抑える！」

「ふむ、まだ落ち着いとらんかったか」

俺がびっくりして固まっていると、ウイストーンがどうしたものと聞いたそうな顔であご髭を撫でた。俺たちを中に入れてくれた職員さんは慌てていたが、自分にも仕事があると言って喧噪の中に戻っていた。

裏口の前で立っていた俺たちの後ろで静かに扉が空き、フードの着いたマントを被った一人の男が現れる。

「おっと失礼。あーあー、大騒ぎしちゃって」

「手が早いな、漫談ギルド」

フードを取った青年は明るい茶髪くらいしか特徴がなく、どこにもいるような顔をしていた。

ウイストーンを見てにやりと目だけが意地悪く笑う。

同業者の互助組織である組合は色々なものが存在する。

冒険者、商人、狩人、職人、魔法、神聖。

俺がこれまでに教えてもらったのはそれだけだが、どうやら他にもあるらしい。

シークギルドというのは聞いたことがないが、衛兵さんにこれだけ親しく話しかける人は見たことがない。

ウイストンよりもずっと若く見えるが、この人は誰だろう。

青年は俺を見るとにっこり笑って、すぐにウイストンの方をむいた。

「あんたらが傍観してる間から、冒険者ギルドは俺たちに仕事を持ってきてたんですよ。知りませんでしたか」

「……俺に振るなよ、そういう話を」

「ほんとに無能ですねー、上層部は。あんたもう辞めちゃえば？」

「だからお前等が嫌いなんだ」

ウイストンの苦虫を噛み潰したような顔にむけて、青年は悪戯っぽくあっかんべえと舌をだす。

どうやらこの二人、言い合っている内容ほど仲は悪くないようだ。

おもむろに角笛を取り出した青年は、喧噪が行き交ってもう何がなんだか分からなくなっているギルドの中で勢い良く大音量をぶっっぱなした。

グレイトホーンの角笛は拡声器としてよく使われている。

唐突な轟音に、流石に全員が黙ってぴたりと止まった。

一斉にこちらを振り向いた人たちに向かって青年がひらひらと手を振る。

「^{マスター}支配人、お届けに上がりましたよ」

奥で大量の書類に埋もれていた顔面髭のおじさんが、隣にいた眼鏡のおじさんの肩を叩いて立ち上がった。

「後は任せるぞ、くれぐれも甘く見るな」
「かしこまりました」

お髭のおじさんがギルドマスター支配人で、眼鏡のおじさんがサブマスター総務取締役。
このあいだ街に来た時に、父さんに紹介してもらったから覚えてい
る。あの時はとてつもないデレ顔だったから一瞬別の人かと思っ
たが、多分間違いない。

俺たち三人は、ギルドマスターにつれられて奥の部屋に入った。

17話（後書き）

ギルド
組合について

大きな物は冒険者、神聖、商人で三大ギルドと呼ばれています。他には作中に出てきたもので全てです。

機能は関係職業主の相互補助と管理です。個人間で手に余るやり取りの代行もやっています。

冒険者ギルドで言うと依頼の斡旋や仲介、冒険者同士のもめ事なんかも解決します。小さな司法もかねている場所です。

ギルド職員は私たちの世界で言う所の国家公務員にあたります。

ギルドは全世界に展開していて、基本的に全て独立していますが横の連携はかなりのものです。通信機器もギルド内においては発達しています。

各店舗事に店長がいて……コンビニみたいなものだと思ってもらえると分かりやすいかと思います。

各国からの要請は内容によって受け入れますが、基本的に権利等に関しては不可侵です。

国家情勢に経済状況が大きく左右されない、ちょっといびつな形になっています。

その理由は追々でてくると思います。

漫談ギルドは正式な呼び名ではなく、スラングです。

先に青年がなにか話していたが、ぼーっとしていたからどんな内容だったのかよく覚えていない。

次は俺の番のようで、テーブルの上に水鏡を置いたお姉さんの前に座らされる。

水色と銀色が混じった長い髪をポニーテールにしたお姉さんが、テーブルの上に胸を乗せてこちらに手を伸ばす。

「じつとこの水盆を見てくれる？」

俺は促されて俯いたが、水の張った盆を使ってどうするんだろう？俺が黙って水面を見ていると、お姉さんが今気付いたみたいな声で言った。

「あら、駄目よマスター。この子冒険者じゃないもの。見れないわ」

「そんな馬鹿な。ロンベルトの能力が継承済みの筈だ」

「いいえ。この子はただの坊やよ」

「どういうことだ？」

「さあ？映し見の魔法は冒険者にしか使えないんだから、この子に使えないっていうことはこの子は冒険者じゃないってことよ。あたしみたいな魔法使いじゃここまでが限界」

お姉さんが不思議そうに小首を傾げて、目をぱちぱちとする。

たしか、このお姉さんはプロメリアさんという、冒険者ギルドに所属する鑑定師だ。

鑑定師は冒険者が持ち込んだアイテムを鑑定するのが主な仕事だが、もう一つ重要な仕事がある。

冒険者が倒した魔物の確認だ。確認する方法は二つあるらしい。

一つは冒険者の魔法陣に吸収された魔力から読み取る方法。

もう一つが、冒険者の目に焼き付いた記憶から魔力を読み取る方法。たしか、そっちの方は水鏡や水晶にその人の記憶を映し出すらしい。

どちらも冒険者相手にでなければ使えない魔術だと聞いたことがあった。

父さんが最後の力で行った継承の儀式は、自分の力を冒険者の資格である胸の魔法陣ごと相手に譲り渡すものだ。

本来なら俺は冒険者の資格を持つているはずだが、そういえば父さんの力はマントに移ったみたいだったからもしかしたら俺はまだ冒険者ではないのかもしれない。

それなら水盆に俺の記憶を映すのはできないよな。

こっそりマントの内側を見てみたら父さんの魔法陣があったから、多分間違いないだろう。

でもこれはどうやって説明したら良いか分からなくて、俺は何も言わずに座っておいた。

「魔導師様に聞いてみましょうか？」

「阿呆か、何ヶ月も持つとれんわ。坊主、覚えてることを話せるか？」

「……うん」

俺は、夜起きたところから覚えていることを訥々と話し始めた。

できるだけ主観は入れずに、死体の状況とか魔物の種類とか、見た事実を思い出せる範囲で伝えていく。

曖昧な所は曖昧だと伝えてから、思い出せるだけ話す。

何かの役に立てばいいと思って、真剣に記憶を引っ張り出した。俺にはこれくらいしかできないから。

この街までどうやって来たかは、よく覚えていないことにした。大人の足でも丸一日かかる距離を半日で辿り着いたのだから疑問はのこるだろうが、助けてくれたグレイトホーン達に迷惑はかけたくなかった。

途中で入る質問にもできるだけ答えて、話終わった頃にはコッコが腕の中ですっかり眠っていた。

疲れたような気はするが、俺の目は依然覚めたままでどうも感覚がおかしい。

「複数の魔法点マジックが拡大して融合、迷宮化も時間の問題か……。想像以上の早さだったな」

ギルドマスターが呟き、眉を顰めた。

魔法点マジックとは魔力を集める性質を持ったブラックホールのようなもので、世界中の至る所に存在する。

一定以上魔力が集まると魔法点はゆがみ、その中に小さな世界を作り出して魔物を育ててしまう困ったものだ。

普通なら魔法点の中と外は繋がっていないから危険性はないのだが、魔力が集まり一定の大きさ以上になると、魔法点はもっと多くの魔

力を取り込もうと拡大し始める。
そうなる魔法点の外と中は繋がってしまふから、なにもいなかった場所から魔物が湧き出てくるという現象が起きる。

冒険者という人たちはそういった魔物を狩って生計を立てているから、ギルドマスターは俺よりも多くのことを知っているのだろう。
渋い顔をしている。

「せめて純銀デインがいれば……」

「口を慎め」

室内にいた一人の職員が呟き、ギルドマスターがそれを鋭い声で嗜めてからは暫く誰も口を開かなかった。大人たちは一様に強ばった表情をしていた。

再度ギルドマスターがなにか言おうとしたその時、勢い良く扉が開けられた。

「失礼する。グローデン・ニーベルングIIナイトレイド、まかり越した」

急いで入ってきた大柄な壮年の男性は、この辺りでは珍しい南方人種特有の褐色の肌をしていた。

いつもはきつちり後ろに撫で付けられている銀髪が乱れていて、汗をかいて息を切らしている。

父さんの友達のグローデンさんだった。

普段の服とは違って今は白銀の鎧を着ていたから、最初は誰か分からなかった。

俺はこれまで穏やかな宿屋の主人としてのグローデンさんしか知らなかったから戸惑ったが、そういえば昔は父さんと一緒にパーティ

ーを組んでいた冒険者だった。

「無事だったんだなサナティ、よかった……。よく頑張ったな」
足早に室内を横切ったグローデンさんは、俺を抱きしめて安心したように息を吐いた。

気付いたら目の前がぐにゃぐにゃに歪んでいて、俺はグローデンさんにしがみついた。

「……つごめんなさ、い………ごめんなさい……っ！」

俺があの時村に戻らなかつたら、父さんは死ななかつたかも知れない。

なんで俺が生きていて父さんが死ななきゃならなかつたのか。
俺のせいだ。誰もなにも言わないけど、きっとそう思ってる。俺だ
ってそう思う。

「子を守るのは親の勤めだ。サナティ、ロンはちゃんとお前を守った。そうだろう？」
グローデンさんが俺の頭を撫でる。

俺は嗚咽で喉が塞がっていたから、ぶんぶん頭を振って答えた。

「自分を恥じるな、サナティ。お前の父さんは世界一の男だ」

18話（後書き）

魔法点と魔物について

この世界に住む魔物は、行使するだけの魔力を持った動物です。普通の動物は魔術は使えません。魔力事態はどんな生き物も持っています。

魔力の多い魔物は、固有種と発生種の二つに分かれます。

コッコやグレイトホーンのように土地に根付いて生まれ育ったものが固有種。

固有種は環境の変化に応じた進化を遂げる、ちょっと強い動物という感じです。

生来穏やかなものが多く、魔力（環境）の変動にもある程度耐性があります。

家畜として飼われているものや、使い魔、戦友になる魔物もいます。

そして魔力点から生まれる突発的な魔物が発生種です。

生まれる原理としては、周囲の魔力が何らかの理由で溜まる 魔力が集まり魔力を引き寄せる地場が生まれる 魔力点が生まれる 溜まった魔力固形化して魔物になる、といった感じです。

基本的に、魔力は一定以上の量が集まると周囲の魔力に働きかける引力を持ちます。

魔力は世界のあらゆるものに含まれているので、魔力点というプチブラックホールが生まれてしまうんですね。

どんどん魔力が放り込まれる中は原初宇宙状態^{ビッグバン}。生命の神秘に魔力が合わさって発生種の魔物が生まれるというわけです。

発生種の特徴としてまず上げられるのが、とても凶暴だということ。魔力点から魔力を集めるという性質が受け継がれているので、まわりの魔力を手当り次第に取り込もうとします。動植物は勿論、人間は魔力が他の生物より多いので積極的に襲いかかってきます。

説明が長くなりそうなので今回はこの辺で。

室内の他の人たちがつられて涙ぐんだり鼻をすすったりしている中で、ギルドマスターの低い声が響いた。

「プロメリア、魔導協会に連絡を入れる。魔導師の派遣を要請、内容は山岳地帯を迷宮固定化申請だ。王国軍には知らせるな」

「……かしこまりました」

ギルドマスターの真剣な口ぶりからして冗談ではないのだろうが、俺は魔導協会という眉唾物な組織が存在していたことに驚いた。

魔導師だけで構成されている世界救助組織が魔導協会なのだが、国家の有無に関係なくあらゆる世界の危機に対応すると言われている。だがその魔導師という存在がすでにおとぎばなしの中でしか語られないのだから、魔導協会の存在がどれだけうさん臭いかわかるというものだ。

この世界は三つの王国と二つの帝国が代表的な国で、あとは小さな国や自由都市、解放地区、同盟領など色々な括りがある。世界地図にある大陸は三つで、中央に今は誰も行き方を知らない大きな島が存在する。

それが俺が生きている世界だが、昔、この世界は国という括りではなかった。

神様が最初に作った世界は今よりもっと小さかったらしい。
その時に世界を治めていたのが、魔導師たちだ。

そのころは世界に魔物なんて存在はいなくて、今よりずっと安全な世界だったらしい。

そんな世界でかつて神様が封印した古き大地を解放して、いま俺が
ユニヴァース
生きている世界を作ったのが魔導師たち。

古き大地は世界の発展をもたらしたが、同時に凶暴な獣や凶悪な魔
族の復活ももたらした。今は魔物と呼ばれている存在の解放だ。

魔物の大進行によって一度は滅びかけた人間たちだったけど、それ
を押し返したのも魔導師たちだ。

魔導師たちは古き大地の奥へと魔物を押し返し、これ以上出て来れ
ないように壁を作り、簡単には出て来れないように複雑な構造を整
えた。

それが今では迷宮と呼ばれるようになっていて。これがウン万年前
の話。

三つある大陸の周囲に最初に作られた迷宮は古代迷宮と呼ばれてい
て、今も変わらずに存在する。
グランパレス

しかしそれだけで魔物たちは終わらなかつた。

古き大地が解放されて魔法点が生まれるようになり、世界の各地に
魔物は現れるようになった。

小さい魔法点は強い冒険者や魔法使いなら壊してしまえるが、少し
大きなものになると普通の人の手には負えなくなる。
放っておくと暴走してどこまでも広がってしまう魔法点を抑える方
法が、ギルドマスターが言った迷宮化という魔法だ。

どういう原理なのか詳しくは知らないが、迷宮化すると生まれくる魔物たちは外に出られなくなるから、一応の安全を確保できるらしい。

教えてくれた父さんも実際のところはどついうものかよく分かっていないと言っていたし、俺もちゃんとは分からない。

だけどもあ、とにかくこれ以上被害が広がらないように対処してくれるなら安心だ。

魔法使いのプロメリアさんが頷いて立ち上がる。

グローデンさんも俺を抱えて後に続こうとした。

「さあ、帰ろう。メリルが夕飯を用意して待つてる」

覚えていたことは全部話したから、もう俺にできることはないだろう。

俺はそう思っていたのだが、ギルドマスターはそうじゃなかったよ
うだ。

「神殿騎士殿、今は冒険者ギルドの緊急事態だ。参考人を連れ出すのはご遠慮願いたい」

「黙れ、捻り潰すぞ」

俺たちの前に立ちふさがった厳めしい顔のギルドマスターに向かって、グローデンさんは吐き捨てるように言った。

「おじさん……？」

聞いたことがないような低い声に驚くと、ひゅっと風切音がしてグ

ローデンさんの左手には戦槌メイヌが握られていた。使い込まれた青銅の戦槌は片手用の小振りな物だが、あれで殴られたらすごく、痛そうだ。

そういえば前に酔っぱらった父さんが粉碎！とか言いながらテーブルを素手でぶっ壊していたが、あれは戦場のグローデンさんの真似だと周りの酔っぱらったおじさん達が教えてくれたことがある。

本物はあれの数倍恐ろしいとおじさん達は笑っていたが、メリルおばさんに正座させられている父さんを見て俺も一緒に笑ったのを覚えてる。

そんなのは今どうでも良くなって、グローデンさんとギルドマスターがなぜか一触即発の空気になっているのが問題だ。

流石にそこまでやらないと思うが、グローデンさんが本気を出したらこんな部屋なんて簡単にふっとぶぞ。

30レベルを越えている冒険者が戦うとそういう次元の話になる。

俺がびびってる目の前で、二人のやりとりはヒートアップしていった。

「魂の契約により、私にはこの子を保護する義務がある。文句があるなら神殿まで来い」

グローデンさんが言うのと左胸の辺りが光り、拳くらいの魔法陣が浮かび上がった。

この世界には二種類の契約がある。一つは通常の商談や取引で使われる、書面に紋章サインを記すもの。そしてもう一つが、こうやって体に魔法陣サインを刻むもの。

どちらも公的な物で履行されるのが当たり前のものだが、魔法陣を使う契約は破った場合の罰則が重い。

契約を破ると、魔法陣を刻んだ部位が爛れ落ちるのが一般的だ。

グローデンさんが言ったような魂の誓いは、誓いを違えれば契約者の命を奪う最も重い誓いだ。

19話（後書き）

迷宮について

やっと冒険らしいものが出てきました（汗

迷宮は古い方が強力になっています。蓄える魔力が多くなるので。というわけで古い順に迷宮番付とその大まかな数、ランクの目安を乗せておきます。

グランパレス
古代迷宮：13（SSS）

ユニヴァース
古き大地の深部。魔導師でも手を出せない場所とされている。

今も封印されている場所で一般人の立ち入りは禁止。

アルカディア
真祖迷宮：5（SS）

別名、魔導師の庭と呼ばれるSS級にまで育った迷宮。

こちらも一般人立ち入り不可。

クリスタニア
結晶迷宮：30（B～S）

A級以上の組合員にのみ解放されている迷宮。

高濃度の魔力が満ちているため、一般人が入ると即死する危険もある。

語源は中が魔力石でできた洞窟のようになっていていることから。

ここからが一般的な話になります。

メイクス
特地迷宮：120（D～A）

迷路のように道や壁が生まれて、比較的探索しやすい迷宮。

ただし畏がしかけられている場合もあるので注意が必要。

亜人系の魔物が多く、常に激しい戦闘が予測される。

ダンジョン
地方迷宮：500（F〜B）

近所の子供が探検場所に行っているものから、大人の冒険者が死にかけるような場所まで様々。

日々構造や魔物が変わるため、ランダムダンジョン成長迷宮とも呼ばれる。

当たり外れが大きく、魔力の固まり（貴重なアイテムや強い魔物）と当たるかどうかは運。

「言い出したら聞かん男だな、お前も。悪いがその子には留まってもらうぞ。別にお前に死ねと言っているわけじゃない。だが王国軍に情報を掴まれるわけにはいかんからな」

「サナティには休息が必要だ。そんなことも分からんのか」

「連れ出さんでもそのくらいできる。元々、ここはそういう施設だ。グローデン、お前の店は随分色んな客が来るそうだな。なんでも時と場合によっちゃあ王国騎士も顔を出すそうじゃないか。いらんりスクは背負いたくないんだ。お前も経営者なら分かるだろう」

諭すような声音だったが、ギルドマスターが口にしたのが売り言葉とということくらいは子供の俺でも分かった。

というより、一気に魔力を解放したグローデンさんの怒気が凄まじい。

あんた馬鹿かギルドマスター、どう考えてもそれは禁句だろう。

グローデンさん一家が営む風花亭は冒険者御用達の宿屋だが、美味しい料理のおかげで昼間にやってる大衆食堂も繁盛している。

夜は一階が酒場として営業しているから人の出入りは多いし、グローデンさんが昔所属していた神殿の人たちもやってくる。

宿は門に近い場所だから当番明けの衛兵さんもよく来るし、まあとにかく色んな人がやってくるのだ。

それは宿屋を開いているなら当然のことだ。

「……もとはと言えばこの事態を招いたのは貴様だったな。貴様のような男をこれ以上のさばらせておくのは我慢ならん。引導を渡してやるっ」

そういえば父さんはギルドマスターとグローデンさんは元々仲が良くないと言っていたが、それにしてもこれは酷過ぎる。

なんで喧嘩してるんだこの二人は。
俺の疲れた頭じゃ分からないが、このままやり合っるのはどう考えてもまずいことくらいは分かる。
誰か止めるよ。

周囲の人たちが青ざめて一歩下がる中、ギルドマスターだけが踏み出して刀を取り出した。

「大局を見んか、馬鹿者が。これ以上王国に財源を与えても戦火が広がるだけだろうが。戦争を終わらせるためにも、迷宮は冒険者ギルドで抑えんとならんだ！なんのためにロンベルトが体を張ったと思ってる！？」

「貴様はその名を口にするな！為政者として名を残したいなら勝手にしろ、俺は知らん。……退け。三度目はない」

グローデンさんが俺を下ろして、一歩踏み出す。

俺は咄嗟に戦槌に飛びついた。

「だめーっ！」

「サナティ、すぐに終わらせるから少し待ってなさい」

俺をそつと退けて、グローデンさんが戦槌を構えようとする。俺は必死にしがみついて邪魔をした。

「なんで、喧嘩するの？……やだよ。もう、だれも死なないで」

「サナテイ……」

「俺、一人でもだいじょうぶだよ。ちゃんといい子にしてるから！」
精一杯の笑顔を作つて、俺はグローデンさんに言った。

少なくとも、俺が納得して残ると言えばグローデンさんだつてこれ以上強くは言えない筈だ。

グローデンさんはこういう時には当事者の意志を優先させると分かっているから、俺は必死に空元気を振り絞つた。少しでも心配してほしくなくて。

「お仕事あるのに来てくれてありがとう、グルおじさん。俺、ちゃんとギルドに強力するからもうちょっとここにいろよ。父さんも多分、そうすると思う」

本音を言うと、グローデンさんについていきたい。だつてここに俺の味方はいないから。

なんでギルドマスターが俺を連れて行かせたくないかは分からないが、俺を監視下に置くことはあつても俺を守ってくれることはないだろう。

分かっていても、俺はグローデンさんと一緒には行けない。迷惑はかけられない。

いくら風花亭が大きな宿だといつても、冒険者ギルドと敵対するのはどう考えてもよくない事態だ。

俺一人のせいでそんなリスクを背負わせたくない。

俺が涙を飲み込んでグローデンさんから離れると、大きな溜め息が聞こえた。

「あーもう、駄目っすよ。これ以上黙ってんのは正直ね、人としてどうかと思う。隠密^{シーク}ギルドとしちゃ失格だが、口を出させてもらうぜ^{ギルドマスター}支配人」

呆れたように口を開いたのは、明るい茶色の髪的青年だった。

「アンタが引かないってんなら、魂の誓いを軽んじたって情報は流させてもらう。街中だけじゃない。そうなると少なくとも明日中にはこのギルドの信用は地に落ちるぜ。この世で最上の契約をないがしろにする相手に商談を持ちかける馬鹿はいねえよ」

20話（後書き）

よろしければ評価、感想など頂けると嬉しいです。

21話

「おつとそんな恐い顔しても無駄だね。王国を警戒するなんて建前はもういいよ。

坊やのマントが問題だつてんなら、うちで何人か人をつけておく。誰も手出し無用ってことだね。

別にアンタは坊やを手元に置いておくのが目的じゃないんだろ？」

「……そうだ、他所には渡せん。王国には絶対にな」

ギルドマスターはそう言うと、右手の手袋を外してそこに浮かんでいる青い魔法陣を見せた。

「俺にも最善を尽くさんといかん理由がある。あいつにそう、誓ったからな」

あれも契約の証だ。

魔法陣が利き手に刻まれているから破れば利き手が落ちるのだろうが、ギルドマスターがそれをやると普通の人とは重みが違ってくる。

各ギルドのマスターや貴族は、自分の紋章を記すために利き手に特殊な刺青を入れている。

この世界での公印はそうやって書かれた肉筆の紋章じゃないと意味がないからだ。

つまりギルドマスターが契約を破棄して利き手を失うと、同時にその地位を失うことになるわけだ。

「こりやまた大層な覚悟で。純銀は大層なやり手だったみたいですね」
青年の口調は軽かったが、それを見て青年とグローデンさんの顔つきは明らかに変わった。

「隠密ギルド、口を出すなら紋章にかけて誓え。できないならお前には義務を全うする権利がない」

「契約文くらい先に見せてもらいますよ。なになに、ロンベルト・デインの有事の際にその家族を保護するだつて？アンタ等不毛な争いしてるんじゃないですよまったく」

青年が二人を交互に見て呆れたような声を出した。そしてまたべろりと舌を見せる。

「なら俺はこいつにかけて誓いましょう。商売道具を引っこ抜かれちゃあお先真つ暗だ。これでよろしい？」

ようやく、俺はこの青年の正体は何なのか薄々と分かってきた。
この世界にはけっこう大っぴらに情報屋と呼ばれる人たちがいる。
その日の両替基準から明日の天気といった手に入りやすい情報から、
魔物やアイテムについて、貴族や政治についてと、扱う情報は様々
だ。

多分、そのまとめ役が隠密ギルドなんだろう。

「隠密ギルドはサルナーティス・デインに関する情報の一切を営利
目的で取引しない。その一切はサルナーティス・デインの意志に準
ずる。」

これは隠密ギルド表総代ブレイメン・キトの名に置いて契約する。

坊や、ちよつとご免よ」

ブレイメンと名乗った青年は、俺の額に軽く触れて黄色い魔法陣を描いた。

黄色は相手だけがリスクを追う一方的な契約だから、俺がなにかしなきゃいけないことはない。

紋章にかけて誓ったことは、その紋章を使う組織全体が守らなければいけない契約になる。

その証拠に、ブレイメンの舌に現れた魔法陣は仮面と短剣を描いた紋章だった。

「これで坊やは安全でしょ。冒険者ギルドに裏切り者がでない限り」

「そこまで肩入れする理由は何だ」

「なあに、俺だってなにもあんたが心配してるようなただ働きしてきたわけじゃねえんだ。これが儲け話になるって踏んだからうちも動くっただけですよ。なんにせよ、坊やには元気に大きくなってもらわないとね」

ブレイメンが俺に手を伸ばしてきたから、咄嗟にグローデンさんの後ろに隠れた。

武器を持っている二人のように恐くはないが、なんだか得体の知れない感じが不気味だ。

「あらら、嫌われちゃったかな」

気にしていない風にブレイメンは軽く笑って離れた。再度グローデンさんが俺を抱え上げてギルドマスターの方をむく。その手にはもう戦槌はなかった。

「帰らせてもらう。かまわんな、ギルドマスター」

「……身辺には気をつける」
「言われなくとも」

幕間 1

秋が始まる季節は、日が暮れてから特に冷える。

夜も更けてきた頃にようやく商人ギルドの主人のジャレットギルドマスターと話し合いが終わり、俺は長い溜め息を吐いた。

「疲れてるみたいだな」

「もう年なんだ。夜も寒さもこたえる」

50を過ぎて体の節々が軋むようになった。

体を動かしていらればそうでもないのだろうが、机に座りっぱなしの今の生活では改善のしようがない。

薄い茶色の髪を撫で付けた向かいの男は30代だった筈だから、このわびしさはまだ分らんだろう。

ジャレットはこの間代替わりをしたところだから若いが、20年以上ギルドの仕事をこなしている古株だ。

その仕事ぶりに舌を巻くことはあっても不安になることはないが、こういう所は流石に年の差を感じさせられる。

「冗談じゃなくて、顔色が悪い。医者を呼んだ方が？」

「いらん。年寄り扱いするな」

暖炉にくべた薪の爆ぜる音を聞きながら、向かいに座るジャレットから書類を受け取り名前と公印サインを記す。

ライオット・リックマール。それが今の冒険者ギルドの支配人の名前だ。

公印を記す際に、利き手に刻まれた魔法陣が光り転写される。

俺は青白く光る契約印に痛みを覚えた。

ロンベルト、俺はお前が命を張るだけの男だったのか。

答えを返す者のいない問いは、口を湿らせるためだけに舐めていた酒精よりも強く腹を焼いた。

「しかし衛兵を拘束するなんて、思い切ったな。これで軍が黙ってるかね」

最初に報告にきた衛兵とサナティを連れてきた衛兵の二人には、参考人としてギルド内に残ってもらっている。

別にこれ以上問いただすものがあるわけではない。

軍に情報を渡さないための措置だ。軟禁に近い状況だが手荒に扱う気はない。

「まだ行儀がいいな坊主。静かにしてもらおうんじやなくってな、ああいう手合いは黙らせるんだよ。法的には問題ない。当人達も大人数いもんならあとはこっちでの話だけだ。お前には初めての鉄火場だ。ヘマだけはするな。後は俺たちで上手くやる」

「そうそう、そういうことだ」

軽く相槌を打つてどこからともなく現れたのは、ギルドマ 隠密ギルドの表総スター代ブレイメンだ。

見た目は20代そこらだが、今いる面子の中では一番の古株だ。

フルカタ 曲剣街のギルドマスターの中でも二番目に年嵩だがまだまだ現役を退く気はないらしい。以前酒のついでに年を聞いてみれば、たしか120とか言っていた。

「予定どおり、軍はまだ魔法点の拡散にも気付いてねえよ。まあ東の戦線にかかりつきりつてのがでかいかねえ。なんせこないだ、砦を三つも立て続けに落されたばかりだ。首代稼ぐ前に首を守らんといかんからなあ。時間稼ぎは十分だ」

フルカタ
曲剣街を治める夏月王国は、三枚葉を並べたような大陸の左上、第二大陸の北西に位置する。

西に広がるケルト地方と呼ばれる大山脈と、東に広がる大平原を切り開いた穀倉地帯を有する強国だ。

しかし富んだ領土に胡座をかいてここ数年は進行が目立つ。戦争にはとにかく金がかかるのが通説だ。

いくらギルドの経営を任されているとはいえ、俺には想像もつかない規模の話だが、物事の原理はそう変わらない。攻めるには金がかかる。それは冒険者も一緒だ。

「上手くやったようだな」

「そりゃあ上々。おかげで毎日寝酒が美味い」

にししつと笑うブレーメンは東のギルドに情報を売ってかなり儲けたらしい。

桶屋が転がるだけで儲かるのが隠密ギルドだ。こういう時には頼もしいが、敵に回すと厄介極まりない。

こうやって無条件に信頼できるのは、ギルドは大陸全土と民のために動くというギルド連盟があつてこそだ。でなければ懐には入れられない。少なくとも、俺はそうだ。

「これで迷宮権利を取れるかどうかは、アンタ等の手腕に期待だ」
ジャレットの顔に緊張が走る。

俺たちがさっきまで詰めていた話もそれだった。

迷宮権利とは、迷宮の所有権を指す。

この街の所有権が夏月王国にあるように、迷宮自体にも所有権というのは生まれる。

だが、迷宮の場合はその地の領主が自動的に権利者に収まるわけではない。

迷宮はどんな規模のものであっても魔物と隣り合わせの場所だ。

まともに治めなければかなりの危険性が伴うため、所有者には一定以上の統治能力が求められる。

それを中央法政局、魔導協会に申請し認められなければ、迷宮権利は得られない。

しかし身入りは大きいから、新たに迷宮ができたならそこらの商人や領主が飛んできて街を興すなんて光景はざらだ。

俺もそのために急いで人をやって、粗利益を取りに行かせた。

ロンベルトの死を聞きすぐに緊急クエストを発行したのがついさっきだが、狩人ギルドと合流した先発隊はもう山に入ったし後発隊も明日の朝一で後を追わせる。

冒険者ギルドの腕の見せ所はまだ後だが、士気を上げるために動いておくのは悪くなかった。

「……三年だ。魔力点の鎮静ソックに一月、仮宿場で半年。建設はどんなに急いでも一年はかかるだろうから、その後に様子見をもう半年。」

申請期間を足しても三年でやる」

迷宮権利を発行しているのは魔導協会の中央司法部だ。発行の条件は、Bクラス以上の安全が確保された法治状態であること。

要するに迷宮権利とは迷宮街の主となる資格なのだ。

権利をもらうのに、普通の街でも一から作るのであれば十年はかかる。

街よりも初期投資が少なくて住む迷宮街であつても五年は見るのが妥当だ。

だが、俺たちは零からのスタートじゃない。

冒険者ギルドにはロンベルト達が届けてくれた魔物や素材の情報がある。

全てが使えるわけではないが、これだけで一年分は時間を短縮できる。

「街一つで三年、ね。その速度ならどうやっただって追いつけねえな。しかしそいつは全部十全以上に順調にいつての算段だ。純銀（切り札）を欠いてんに強気だねえ坊主」

デイン純銀とは、冒険者の中でも黒系統の魔物に特化した能力を持つ冒険者に送られる称号だ。

迷宮の魔物はほとんどが凶暴な黒系統の魔物だから、ファルカタ曲剣街で唯一その名を持っていた男がいないのは痛い。

だが、俺には切り札がもう何枚があった。

その中でも一番新しい、効果の大きいものをこの場で見せ札として切る。

「サルオーデイス息子を使つ」

幕間 2

二人の表情はそれぞれらしいものだった。訝しげな顔をしているのがジャレッド。

得心を得たように口の端を歪めたのがブレイメン。

これは単純に、今晚のサルナーティスを見ていたかどうかの違いだ。

「持っていたマント、あれはC級の魔道具だ。魔法具でも魔術具でもない、限定魔導で作られたアイテムだ」

「その子が制作者なのか？」

「うちの筆頭鑑定士のお墨付きだ。間違いない」

俺は初見ではそこまで分からなかったが、マントのことは途中でプロメリアが内密に報告してきた情報だった。

半信半疑というより疑いの色が強いジャレッドに言っていると、なるほどと呟いて顎に手をあてた。

頭の中で算盤を弾いている時の仕草だ。

「お前達にも言うておくが、限定魔導師についてはどこの組合も干渉不可だ。成人する十五の年まで能動的な勧誘は行えず、本人の意思をもつてのみ所属契約は成立する。ただし、魔導協会の許可を得た範囲内での話でだ」

「今更言われなくとも分かってる」

だんだんとジャレッドの顔がにやけだしたので釘を刺しておく、

ふて腐れたような顔をした。

商人はこの世でもっとも金が好きの人種だ。

目の前で金貨の入った袋を鳴らしてやればとたんに大人しくなるからコツさえ掴めば扱いは楽だ。

それに元々、ジャレットは慎重派だ。

このぐらい言い含めておけばサルナーティスに変なアプローチをかけたりはしないだろうし、本人にはかなりの便宜を図ってくれるだろう。

まともに算盤が弾けない商人は三流だが、金額でしか利益を勘定できないのはまだまだ二流。

その点で言えばジャレット程合理的な商人はそういない。

家畜も奴畜も生かして生産させている状態が一番効率が良い事をよく知っている。

「詳しい能力は鑑定してみんと分らんが、まあ確実に錬金術師のスキルプライムアビリティ先天資格関連だ。すぐではないだろうが、物価に変動が出る。頼むぞ」

「おうよ」

「ブレイメン、あんたも上役マダムにしっかり言い含めておいてくれ。抜け駆けはナシだ」

「わーかってるよ。そのための契約なんだから、もうちょっと信用してくれって」

おどけたように両手を広げるブレイメンを黙殺して、俺は痛むこめかみを抑えた。

今日のうちにやっておかなければいけない段取りはこれで終わりの筈だが、手落ちがないか何度も反芻して確認する。

隠密ギルドはサルナーティスを利用することはあっても、取り込むつもりはない。

元より裏向きの性格ではないし、囷に使うにしても上手くいく保証は少ない。魔導関連にはイレギュラーが付きものだ。

隠密ギルドは想定外の事態を何より嫌うから、そこは安心していい。

それにサルナーティスの一通りの安全はさっきの契約で保証されているから、よほどのことに首を突っ込まなければ大丈夫だろう。

あの契約を引き出せただけで、無意味に粘った甲斐があった。

俺の評判に多少響くだろうが、どうせそんなものはこの事態ですでに落ちている。今更気にするようなものでもない。

魔法ギルドと神殿ギルドにも追って連絡を入れなければならないが、余計な混乱を抑えるためにこれは迷宮の懸案が一旦落ち着いてからの方が良い。あとは俺が冒険者ギルドを抑えておけば事足りる話だ。

俺の考えがまとまるのを待っていたようなタイミングでブレーメンが口を開く。

「報告はいつ？」

「本人が落ち着いて、ある程度時間が経ったら俺から入れる。それをネタに中央から魔導騎士を派遣させる」

連合組合ギルドの職員は、魔導に関連する職務上の懸案は魔導協会に報告する義務がある。

報告の内容はまだ認定されていない魔導師の報告であったり、違法な魔法使用の告発がほとんどだ。

今回のサルナーティスの件についても、未確認の限定魔導師の報告

という形で行う事になる。

限定とはいえサナティが魔導を使えるのであれば、その能力がなんであれ中央からの護衛がつく。

護衛は魔導師のための騎士と呼ばれる魔導騎士であり、戦闘に特化したS級以上の実力を持つ者だ。

魔導騎士は魔法使いの中でも戦闘に特化した者で、この世界における最強の代名詞。

これ以上の護衛はいないが、魔導騎士をつけるということはサルナ―ティスの身柄自体が中央の管理下におかれるということだから、これにも注意が必要になる。

サルナ―ティスの能力スキルによっては中央に軟禁される事態も起こりうるから、ともかくどんな能力スキルを持っているか確認しないと始まらないが、俺がそんなことを気にしているなんてここでこいつらに教える義理はない。

「門番を据えるわけね。王国に持ってかれるくらいなら中央直轄にしようって腹か。なるほど。悪くない。悪くはないが、お前そんなに王国が嫌いだったかね」

迷宮化が始まっている地域で限定魔導の報告があれば、中央は十中サ八九ルナ―ティス限定魔導師の護衛と新規迷宮の門番として魔導騎士を派遣するだろう。

今回は複合迷宮だからその可能性はなおさら高くなる。

そうなれば迷宮権利は中央が所有することになり、ケルト迷宮は所王の権力が届かない治外法権だ。

ブレイメンは正確に俺が言わんとした事を読み取り、不思議そうに

小首を傾げた。

中央直轄地域となれば五大帝国よりも税は軽くなるが、儲けの大本である迷宮権利は手に入らない。

躊躇いなく中央に任せる判断は今の段階では早計だろうが、それは利益を重視したらの話だ。

だがこの状況で、俺が優先させるのは冒険者ギルドに入る金ではない。

右手の魔法陣が青く光る。

ああそうだ、分かっている。忘れちゃいないさ。目的は戦争を終わらせることだ。

お前は子供達の未来のために命を懸けた。俺だって見ている場所は同じだ。

あんな糞つたれたものにつき合ってやる義理なんかない。

「そうでもなかったがな、今では憎い。この手で滅ぼせるものならそうしたい」

思ったよりも低い声になったが、腹の内をそのまま吐き出せば存外すっきりした気分になった。

面白そうにブレーメンが片眉を上げジャレットが眉をしかめる。

幕間 3

もつと早く魔法点マジックに対処できていたら、こんな話にはならなかった。いつものように軍が討伐隊を組み、活性化する前の魔法点を叩き潰せばそれで終わりだ。

だが、今回はそうならなかった。戦争のせいだ。

夏月王国は東に軍を回していたから、交易都市とはいえギルドが全て揃った治安の良い曲剣街フェルカタの駐屯兵は治安維持ができるだけの最低限のものになっていた。

魔法点マジックはたとえ早くに発見できたとしても、統率された人間が数百人規模で当たらなければ対処できない。

万人単位で兵を抱えている軍でなければ話にならないのだ。夏月王国に要請はした。軍には何度も掛け合って話し合いにならず怒鳴りあった。

殴り合いになったのも一度や二度の話じゃない。

それが十年前だ。

軍とギルドの違いは、一つだ。部下に仕事のために死んでこいと言えるかどうか。

中央直轄であるギルドにはそれができない。軍にはできる。だが、その軍が動けなかった。残された手は遅延策だけだった。

魔法点マジックから溢れる魔物を定期的に狩り魔力の集中を抑え、魔物の情報を集めて迷宮化に備える。

言ってしまうは簡単だが、四六時中気が抜けない仕事だ。しかも数年以上かかる長期間となれば志願者などいる筈がない。最初に要請を出した時には誰も手に取らなかった。当たり前だ。報酬は安くはなかったが、リスクが未知数の仕事なんか誰も受けない。

再度内容を詰めて交付した時には、これは使命仕事ミッションになっていた。使命仕事は該当する戦力を持った冒険者に向けた、半ば強制の仕事だ。

断るには相応の理由と違約金がある。

『いいよ、んじゃ俺やるわ』

ミッション受注者が集められた中で、最も危険な山中の村落に滞在する仕事を請け負ったのはロンベルトだった。

『だいじょぶだいじょぶ、いざとなったら嫁担いで逃げるし』

その軽さに俺まで絶句している中、ロンベルトはひらひら手を振って逃亡許可を確認した。

勿論、その場を死守しろなんて指示をするつもりはなかったから、拡大し始めたら逃げ出してくれてかまわなかった。

だが、まともに逃げ仰せるなんてのは一生の運を使い切ったとしてもできるかどうか。

『マスター。俺さ、けつこう冒険者このしん好きなんだよ。馬鹿でもやってくれるし、ちゃんと生きていける。でも戦争はだめだ。軍人も嫌いやねえけど、あれは人が死ぬ以外なものない。これ以上、王国の好きにさせちゃあいかなよ』

ロンベルトは、かつて奴隷の身分にいた。

俺の父親が雪原で倒れていたところを拾ってきてこの街に居着いた。二十は年がはなれていたから、弟と呼ぶには幼すぎ息子として接するには大きすぎて当初は随分あぐねたものだ。

結局のところ、未だにロンベルトを呼ぶ上手い関係は見つけられていないが、俺に取って大事な人間であることに変わりはない。

嫁をもらうと言った時にはギルドを上げて酒盛りをした。

息子が生まれた時には街に戻ってくるように再三言ったががんとして聞かなかった。

『途中で仕事を降りるのは二流、最初から降りると分かかって受けるのは三流だつて親父さんも言つてたじゃねえか。俺は胸張つて死ぬるように、もう背中だけは見せたくねえのよ』

あいつは、俺が守るべきものに命をかけた。

なら俺もあいつが守るはずだったものを同じように守るだけだ。俺の利き手で青白く光る誓いは、そういうものだ。

サルナーティスを本当に政治的な駆け引きで使うことはない。

この場で二人に提示したのはあくまでも最終的な安全策^{セーフティ}として。実際に使う気はないし、順調にいけば万事滞りなく進む事態だ。

この場であえてサルナーティスの話を持ち出したのは、これからの街^{スキル}であの子の生活を保障するためだ。

能力の第一発見者である冒険者組合^{オレ}支配人が率先して情報を流しておけば、どこの組合が取り込むというレベルの話ではなくなり街全体の利益としてサルナーティスを認めるようになる。

事実、ジャレッドがすぐに算盤をはじき出したのだから、その反応に文句はない。

グラスに半分残っていたウイスキーを飲み干し、背を長椅子に預けて大きく息を吐き出す。

大方の予定が想定通りに進んだ故の安堵だったが、ブレイメンがこいつにしては珍しく、素直に好意的に解釈してくれたような反応をした。

組合の中で被害が大きいのは俺の所だからあながち間違っではないないんだが。

「酔ってんのかい、大将。年はとるもんじゃないね」

「本当にな、かなわん。……おい」

飲み干したグラスにどぼどぼ琥珀の液体を注ぎ、駆けつけ一杯と言わんばかりの勢いでぐいっとブレイメンが煽る。

そんな飲み方をする酒ではないんだが。

「手伝ってやるよ。一人で呑むには多いでしょ」

三杯分しか減ってないウイスキーの瓶を振ってブレイメンがそつと笑う。

ここで感動しては行けない。こいつは酒が呑みたいだけだ。

「やめろウワバミ、勿体ない！」

こいつに一晚で潰された街の酒場は一つや二つじゃないんだから俺の焦りは間違っていない。

「けちけちすんなよ。ジャレッド、その辺に50年物が隠れてるぞ。開けちまえ！」

「マジかよ、そりゃ見過ごせねえな」

「お前らなめっ……！」

幕間3（後書き）

そろそろ人物一覧を作ろっかなと思っています。（自分のために）

22話(前書き)

ここからサナティ視点に戻ります。
時系列が前後しておりますのでお気をつけください。

22話

それからのことはよく覚えていない。
気付いたら風花亭に着いていた。

西部劇に良く出てくる酒場のような扉を潜ると、慌ただしく動いていた人たちが俺たちに気付いて近づいてきた。

「サナイテイ！」

「良かったな生きてて！」

「元気そうじゃねえか、こりやめでたい！」

皆、ファルカタ曲剣街を拠点とする冒険者だ。

おじさんたちは口々に俺の生還を喜んでくれて、俺は初めて生きていてよかったと思った。

伸びてきたおじさんたちの手にもみくちやにされて困っていると、奥から豪快な声が飛んできて人垣を割った。

「小さい子に寄ってたかってなんだいまったく！ほらどいた、邪魔だよ」

そう言っかけてきたのはメルルおばさん。

グローデンさんのお嫁さんで、風花亭の女将さんだ。

小柄ながら恰幅の良い姿は肝っ玉母さんって感じ。

宿の看板娘として有名だった面影はすっかり残っていて、ふっくらした美人さんだ。

ちなみに、グローデンさんは入り婿らしい。

「まあまあ、こんなに泥んこになって。まずはお風呂だね」
「頼むぞ」

「任せときな。あんたらはさっさと支度して仕事に行きな！」

周りにいた冒険者たちを一喝して、メリルおばさんは俺をひょいと受け取って奥へと進んでいく。

厨房の横を突っ切って井戸のある中庭に出ると、メリルおばさんは大浴場に俺を連れて行った。

ぼいぼいっと服を脱がされてぼいっとお風呂場に放り込まれた。ココは流石にここでお留守番だ。

「そおれ、パス！」

がらりと引き戸を開けて投げられた俺を咄嗟に青年が受け止めて、なんとか事なきを得た。

しかし風呂場は石敷きなんだから、これ下手すると大怪我してもおかしくない。

まあ風花亭だと大体いつもこんな感じだからもう慣れっこなんだけど。

「うお！危ねえなお袋、打ち所悪かったら死ぬぞ」
俺をキヤツチしたお兄さんはジルゼツト。

六人兄弟の次男にあたる苦労人だ。兄弟の数は今の所六人だけであって、まだまだ増える予定らしい。

年は今年で14で、もう宿で仕事をしている働き者。

おじさんと一緒に仕入れを担当していて、鍛えられた体はとても14とは思えない。

黒髪なのはどうやらおじいさんからの遺伝らしい。

「何言っただい、このくらいで死んでたらガゼルなんかとつくに墓の下だよ。」

ジズ、面倒みてやっておくれ。お風呂出たらご飯用意しとくから。

ガゼル、あんたはさっさと出て残りの仕事終わらせてから寝るんだよ！」

「分かった」

「えー……」

「返事！」

「分かったよ！」

湯船の中でふて腐れた返事をしたのは三男ガゼル。

おばさんと同じ色の金髪とおじさんと同じ浅黒い肌と分かりやすい俺より一つ下の七歳だが落ち着きがなくて、もつと子供に見える。

年が近いのもあって、兄弟の中では俺と一番仲がいい。

「久しぶりだな、サナティ！急にどうしたんだ？おじさんの仕事？ぶっ……！」

「さっさと出て終わらせてこい。明日の仕込みまでに終わったら一緒に寝てよし」

ガゼルの頭を叩いて湯船に沈めて、ジズ兄が俺を連れて湯につかる。

風花亭の名物とも言える大浴場は、前の世界の銭湯の半分くらいの大きさだが、この世界ではかなり広い部類に入る。

宿泊客はここが毎日使えるから、冒険者には人気の設備だ。

普通の家では週に一度でも湯につかれば贅沢な暮らしに入るが、冒険者達は仕事に出れば泥まみれ血まみれで帰ってくる。

流石にそんな人たを放っておくわけにもいかないから、50人は泊まれる風花亭だと毎日風呂は湧かす必要があるのだ。

そついうわけで、グローデンさん一家は毎日冒険者達が帰ってくる前にひとつ風呂浴びてしまうのが恒例になっている。

「痛ってえな、馬鹿ジゼル！」

鼻からお湯でも入ったのか顔を真っ赤にして、ガゼルは再度伸びてきた手から逃げるように湯船から飛び出した。

「飯食つても起きてるよ、こないだ言つてた奴見せてやるから！」

それからご飯を食べて、気付いたらベッドの中だった。

どうやらご飯を食べながら寝オチしたらしい。口の中ににんじんが入っていてびびった。

俺が起きたのは、隣に誰かが入ってきたからだ。

グローデンさんちのベッドは大きくて、子供はまとめて一緒のベッドで寝ている。さすがに男女は別だけど。

俺も泊まりにきた時はいつも一緒だから今更違和感なんてないが、今日は妙に目が冴えて起きてしまった。

「わり、起こした？」

「ガゼル？」

「前に言つてただろ、グリシュラ青銀石の話」

23話

「ごそごそとベッドの中でガゼルが見せたのは一欠片ほどの黒い石だった。」

ヴリッシュユラ 青銀石は魔石の一つで、魔物の体内でしか生成されない。

普通の魔物なら爪くらいの大きさが一般的だが、これだけの大きさとなるとかなり強い魔物を倒したことになる。

魔石は契約の魔法陣を描くために用いられる。さつきブレイメンが契約を交わしていたときも、イヘツト黄銅石という魔石を使っていた。

魔石を砕いた時に生まれる魔力を使って契約の魔法陣を描くと、それは半永久的な誓いになる。

父さんと母さんが結婚するときも、ヴリッシュユラ青銀石を使ったそうだ。

これは大きければ大きい程相手の身を守る効果が大きくなるから、冒険者たちは結婚前にごそって大物を倒しに行く。

魔石はそういつた契約を取り仕切る神殿が高値で買い取ってくれるから中々一般には流通しないのだが、まさか。

「ガゼル、これどうやって……」

「なんつー顔してんだよ。こないだ父ちゃんが持って帰ってきた中にあつたから頼み込んでもらったんだ。ちょっと待ってるよ。もうすぐ兄ちゃん達がくるから」

「どうということ？」

「ガ・ゼ・ル、仕事は終わったのか？」

ゆっくり俺たちがいる部屋の扉が開いて、入ってくる人影。ジズ兄だ。

「おおお、終わってるよ！でねえと母ちゃんに殺されるっ」

「まあそうだな。ヒルダ、クリス、内緒だから静かにな」

ジズ兄の後ろからそつと入ってきたのは、二人の女の子。

六人兄弟の三番目が12歳のヒルデガルド姉で、五番目が六歳のクリステイア。

ヒルダ姉は腕にまだ三歳のテッドを抱いていた。

皆一緒にベッドに入ってわいわいしていると、なんだか最初にこの風花亭に来たときみたいだ。

ジズ兄が厨房からくすねてきた杏やナッツを齧りながら、おしゃべりが始まる。

この前俺が街に来たのは三ヶ月前だから、それから街であった出来事を皆が教えてくれた。

ジズ兄はもうグルおじさんと一緒に週に一度は狩りに出掛けるようになったし、ガゼルは商人のファットマンさんのところで文字と計算を教えてもらうようになった。ヒルダ姉は魔術の勉強、クリスは料理。

あれができるようになった、こんなことがあったと楽しそうに話してくれるのを聞いていると、俺も楽しかった。

俺が布団のあったかさに負けてうとうとしだした頃、控えめに部屋の扉が開いた。

「ごめ、遅くなった。まだサナティ起きてる？」

「ぎりぎり。兄貴、早く」

「うん、始めよう」

急いでベッドに駆け寄ってきたのは、フロリアン。

長男のフー兄は神聖ギルドで神官として修行している16歳。

俺の母さんとちょっと似ていて穏やかな人だ。

「さあ、始まるわよ！」

「クリス、静かに……！」

皆が布団をはねのけてベッドの上で丸く円になって座る。

俺の隣にはガゼルとヒルダ姉。年齢順になって皆で手を繋ぐ。

中央にフー兄が広げた紙を置いて、その上に青銀石^{ウリシユラ}。紙には魔法陣が描かれていた。

「風降り花咲くしとねにて、我らともがらの誓いをここに打ち立てる」

フー兄の静かな声が子供用の寝室に響く。魔力を伴った詠唱を聞いて、軽く鳥肌が立った。

なんだこれ、今から何をするつもりだ？

俺が慌てているとガゼルが力強く手を握った。

ヒルダ姉が俺を見て優しく言う。

「大丈夫。みんな一緒だよ」

俺はなんとなく安心して、二人の手をそっと握り返した。

「家族はみなのために、みなは家族のために。捧げし魔力はともがら^{ウインガーディア}を守る盾となり、守護する意志は剣とならん “守護契約”」

黒かった青銀石^{ウリシユラ}がその名前通りの青銀色の光を放ち、墨で描かれた魔法陣に同じ色の光が灯る。

魔法陣は詠唱の間にどんどん広がって行って、繋いだ俺たちの手の上に重なり消えた。

初めて目にする契約魔術の光景にみんな言葉を失っていた。俺もぼけっとしてしていると、目の前でふらりと傾ぐ体があった。

「フー兄！」

「あはは、ちよつと魔力を使い過ぎたかな……」

ジズ兄に支えられているフー兄は、俺の頭を撫でながら言った。

「サナティ、これで誰が何を言おうと僕たちは家族だ。もう、一人じゃないからね」

家族。

父さんと母さんと、生まれてくる筈だった俺の兄弟。

もう誰もいない。生きているのは俺だけだ。

だから正直、もうどうなつてもいいと思っていた。

みんなを殺した魔物を倒せるなら、何でもする。何だってする。

でも本当は分かっていた。

魔物に殺される人は実は交通事故で死ぬ人より多い。

多分、平均寿命なんて30歳くらいだ。

死因のほとんどは魔物、続いて病死、事故死。

この世界で死というものはどこまでもついて回る身近な存在だ。

悲しむのはいけないことじゃない。でも、引きずって自棄になるのは駄目だ。

俺が死んだら、たぶん皆はたくさん泣くだろう。皆を悲しませるなんてできない。

俺の中でどろどろと渦巻いていた暗い感情は、目から溢れる涙に混ざって流れていった。

その日は皆で一緒になってだんごになっていつのまにか寝ていた。今までずっと感じていた寒さは、もう消えていた。

翌朝に俺たちを見つけたメリルおばさんに全員雷を落されたけど、誰も後悔なんてしてなかった。

おばさんの前では項垂れてたジズ兄とガゼルも、おばさんの後ろですぐにふざけあつて拳骨を落されていた。

眩しい朝日の中で、俺は改めて力が欲しいと思った。俺を大事に思ってくれる皆を守るだけの力が。

それから、二年の月日が経った。

23話（後書き）

契約について

契約とは魔力を使つてする約束のことで、内容に合意した人同士の魔力を繋ぐ形で行われます。

魔力を繋ぐ仲介は作中の描写のように魔石が果たします。

契約が記されると、お互いの体の一部に契約の魔法陣が出ます。

魔法陣が光る色によって、どのような契約か察することもできます。

緑：契約代償はお互いの命、最も重い契約

青：対等な立場で交わす、結婚や義兄弟の契りとして使われる

黄：契約主のみ代償を負う、商業的な契約

赤：契約対象のみ代償を負う、隷属の証

契約破棄時のペナルティは重い契約だと死亡、軽い契約でも体の一部機能を失ったりする、大変リスクの大きいものです。

1話（前書き）

ここから一章開始、10歳になったサナティのお話です。

1話

真つ暗な中で、銀色の蛇が泉の傍にいた。
きらきらと光る泉、少しの緑と銀の蛇。

たまに見る俺の夢の中の光景だ。

「アンタ達、朝だよ起きな！」

メリルおばさんにはっさーと布団をひっぺがされて、俺は慌てて体を縮める。

そんなことしたって寒いのは変わらないから起きて寝間着から着替えた方があったかいのは分かっているんだけど、すぐには無理。
冬の朝に布団から出たくないのはどの世界でも一緒だ。

「ジズ兄、邪魔」

「次の鐘まで……」

そろそろじつとしているのも寒くなってきて、俺とテッドを湯たんぽ代わりに抱えて離さないジズ兄をひっぺがして起きあがる。
次の鐘って二時間先だぞ。

「駄目！テッドも起きて」

「やーだあ」

「もう、知らないよ」

いやいやとジズ兄に抱きつくテッドを見て、俺は一つ溜め息を吐いた。

毎朝のことなんだからいい加減覚えたら良いのに。

巻き込まれるのはご免だと、俺はベッドから降りて着替える。

シャツとズボンは自分の下に敷いて寝ていたからまだちょっとあったかい。

その上からベストと上着を着て、あとはいつものマントを引っ掛けて出て行くこうとした矢先に、勢い良く部屋の扉が開いた。

「覚悟！」

「わああああっ！」

飛び込んできたガゼルが寝ているジズ兄目がけて木剣をふり下ろした。

既に半泣きの悲鳴はテッドのだ。

ひゅつと風切り音のあとにボグつと鈍い音、次いでうめき声。

「あーあ、もう」

「……………うぜえ」

ジズ兄はテッドを抱えたままガゼルを沈めて唸った。

どうやったかというと、ふってきた木剣を片足で押さえつけてもう片足でガゼルの顎を蹴り上げた。

最近はあるまりなかったけど、よくあることだから俺はもう驚いたりしない。

よくやるなあと呆れるだけだ。

「コッコ、おいで」

部屋の隅に置いてある籠に声を掛けると、毛布からぴよこつとコッコが顔を出す。

俺は大泣きしているテッドを抱えて、もう片手でガゼルを引きずって中庭まで行くことにした。

コッコもいつものようにとことこ俺の後ろをついてくる。

ガゼルはその辺に置いていて、ぐずぐず泣いているテッドを井戸の淵に座らせて涙を拭いてやる。

ついでに水を汲んで顔も吹いてあげた。

「テッド、朝起きないとああなるんだぞ。明日からちゃんと起きる？」

「起きる……！」

「ちよつとジズ兄、早く起きてよ。シーツが取り替えられないじゃない!!！」

「寒い、馬鹿窓開けんなよ。つーか14にもなって男部屋入ってくんない！」

「ぐうたら寝てる兄さんが悪いんでしょ！」

「お兄ちゃんのねぼすけ〜」

おっと、今日は第二次戦争が勃発した。

今度は洗濯物を回収してくれる女の子達vsジズ兄だ。

木や石作りの建物に防音性なんてものはないから、言い合ってるの

がここまで丸聞こえ。
この分だとおもてまで聞こえてるんじゃないかな。

「あんた達、いい加減におし！五分以内にテーブルにつかないと朝飯抜きだよ！！」

メリルおばさんの大きな声が風花亭に響き渡って、俺たちは慌てて顔を洗い食堂に行く。

着替えて顔を洗わないとご飯にしてくれないからね。

「くそ、なんで勝てねえんだろ」

ガゼルはふらつく頭を振りながら考え込んでいる。

やっぱり最初に声あげるからばれるんじゃないかな。

前にそう言ったら、黙って仕掛けるなんて闇討ちみたいなこととして勝っても仕方ないって言われたけど。じゃあどうしたいんだよお前。

俺たちが食卓につくと、フリー兄とグローデンさんはもう座っていた。二人とも寝ていないから、ちよつと睨が重そう。

フリー兄は神殿の夜勤だったし、グローデンさんは宿の夜番担当だから、今からご飯を食べてお休みなさいというわけだ。

俺たちの後ろから入ってきたクリスが二歳になるユーリアを抱いて椅子に座る。

「ちよつと聞いてお父さん、兄さんったら信じらんない！ベッドの

下に」

「だーだーっ、ヒルダ手前それ以上言うんじゃねえっ！」

「……いいから早く座りなさい」

うわあこいつやつちやつたなあみたいだな、生温い目でジズ兄を見るグローデンさんとフリー兄。

うん、エロ本の隠し場所としては定番だけど、みんな雑魚寝の風花亭でそれをやるのは迂闊すぎるよ。

「テッド、クリス、まだ駄目だよ」

俺はその横でこっそりパンに手を伸ばそうとした二人を嗜めたけど、気持ちは分からなくてもない。

食卓の上には沢山のおいしそうな料理が並んでいるんだから。

まず目に入るのが切り分けられた焼きたての大きな丸パン。

風花亭自慢のふかふかながらどっしりしたとびっきりのパンだ。

パンにつけるのは大きな瓶に入ったバターか桃蜜かチーズ。これだけでも十分美味しい。

食卓の真ん中には一人一つ以上あたりそうなベーコンエッグの山があつて、オレンジのドレッシングがかけられたサラダも大皿に山盛りだ。

あっちの皿にはソーセージやハムが盛られていて、こっちの皿にはラタトゥユみたいなたマトマト煮込み。

皆の席に一つずつ置かれている今日のスープは、白いからクラムチヤウダーかな。

そついえば昨日は貝が大量に捕れたんだっけ。

スープに入ってる貝はハマグリくらいの大きさがああるけど、シジミっぽい味がする。

こっちの世界の食材は大きいのが多いからこのぐらいで驚いていてはいけない。

「お腹減ったよ〜」

「おいしそう!」

どれも湯気が出ていて美味しそうだ。

ガゼルなんか辛うじて手は伸ばしていないが、食卓に穴が空きそうなくらいガン見している。

でもメリルおばさんが来るまでは皆我慢だ。

皆でご飯を食べられるのは朝だけだから、なんだかんだ言いながら皆、全員揃うまで待っている。

俺も美味しそうな料理に目を奪われている前で、信じらんない!と叫ぶヒルダ姉を適当にあしらいながら、ジズ兄がソーセージとハムが乗った皿をフー兄の前から持っついていこうとして無言のまま睨み合っになった。

おっと、俺も早く陣地を用意しないと。

これから始まるのもまぎれもない戦いだから、準備をしておかないと負ける。

必要な取り皿を取って作戦を練っていると、メリルおばさんがやってきた。

「メリル、お前も早くおいで」

「あいよお待たせ」

全員が席に着くと、俺たちは揃って手を合わせた。

この世界では握手するみたいに自分の両手を握るのが食事の前のお祈りだ。

「……………いただきます」「……………」

言うや否や、フリー兄とジズ兄が握ったフォークが互いを牽制しながら食卓の中央を制した。

目当ては言うまでもない、肉だ。

俺はまだその争いに参戦する勇氣はない。

ガゼルは一步出遅れたがなんとか出来のいい部位を引っ張ってきていた。

俺はトマト煮込みをよそって冷ましながら、バターを塗ったパンの上にハムエッグを乗せてかぶりつく。

肉の脂とバターが染みたパンが程よくマッチして旨い。

空いている手ではガゼルが持つていこうとした自分のスープを確保しておくのも忘れない。

一人一人用意されている料理はおかわりなしだから、持つていかれると困る。

口一杯にパンをいれたまま器用に舌打ちしたガゼルに向けて、俺はにやりと笑う。

片面にバターを塗ったパンを皿の上に広げて用意したら準備万端だ。

まずはサラダをパンの上によそって、その時にお返しとばかりにガゼルの取り皿に大量投下しておくのも忘れない。皿に盛られた料理は戻したり残したりしてはいけないから、これで野菜が嫌いなガゼルのペースが落ちる。その隙がチャンスだ。

向かいでは俺がガゼルにしたのと同じように、お互いの皿にパンを積むフリー兄とジズ兄。
いまこそ好機。

俺は少ししか減っていないハムとソーセージの皿につっこんだ。フオークを。

隣に座ってるテッドの分もとってやりながら、その上に具沢山のケチャップをかけてパンで抑えてかぶりつく。まじうっめえええ！！

美味しいのもあるが、肉は特に魔力含有量が多いから食卓では毎回取り合いになっている。

戦っているのは主にフリー兄、ジズ兄、俺、ガゼル。この四人だ。

魔力の大きさというのは生まれた時から個人差があるけれど、後から伸ばす分で十分追いつける範囲だったりする。

魔力を伸ばす方法は二つあって、魔物を倒して力量レベルをあげて全体のステータスステータスを上げると、こっやってご飯を食べて魔力を直接とる方法の二つだ。

この場合で言う魔力というのは、ゲームでいうところの最大MPみたいなもの。能力スキルを使うにも魔術スペルを使うにも魔力は必要になる。俺たちのように戦いに出る人間にとって多いに越したことはないから、育ち盛りは毎朝こっやって戦っているというわけだ。

そんな俺たちをグローデンさんとメリルおばさんがお茶を飲みながら眺めつつ、女の子達がデザートを楽しそうに食べている。
風花亭の朝は、いつも大体こんな感じだ。

2話

俺たちの朝ご飯が終わったら、次は食堂の朝ご飯の手伝いを始める。

宿に泊まっている人の朝ご飯は食堂で出すから、その準備を皆で手伝うんだ。

といっても料理は厨房の人達が作ってくれているから、俺たち子供の仕事はカウンターで皿によそうだけ。

お客さんは時期によってまちまちだけど、平均して五十人くらいはいつも泊まっているからけっこう大変だ。

食堂は入り口でトレーを取って、パン、スープ、サラダ、おかず二種の五皿を順番にもらって席に着く。

俺はスープ担当だから、今のうちに幾つかよそって準備をする。

こうやってたくさんのお食事を用意していると、なんだか給食を思い出してちよつと楽しい。

風花亭の朝ご飯はかなり豪華だ。

ふつうの家だと、大抵朝はパンとスープにチーズをちよつとくらいで軽くすませるのが基本。

俺が村で生活していたときもそんな感じだったし。

でも迷宮に潜る冒険者たちはそれだと駄目だそうだ。

前にグローデンさんがその理由を教えてくれた。

「空きつ腹の戦士と満腹の戦士の腕が同じなら、まず間違いなく満腹の戦士が勝つ。体の動きが違うし、精神的な余裕も違ってくるからな。」

火事場の馬鹿力なんてものもあるが、冒険者は生きて獲物を持ち帰ってこそ意味がある。

それに迷宮から帰ったら朝以上に美味しい飯を食うんだと思えば、気合いが入らんこともない」

最初は朝のうちにお腹いっぱい食べちゃったら仕事にならないんじゃないかとも思ったが、実際考えてみれば食べないと動けないよね。部活の試合の日の朝だって、できるだけエネルギーになりやすいものをほどほどにして気を使ったのだから、多分そんな感じなんだろう。

そんな仕事が毎日続くんだから体が資本の冒険者は大変だ。

俺がせっせとスープをついでいると五つの鐘が鳴って、食堂の扉が開きお客さん達がぞろぞろ入ってくる。

「おはよう、サナティ」

「おはようございます！」

泊まっている人は冒険者が多いけど、商人や神官さんなど様々だ。通り過ぎていく手にたまにわしゃわしゃ撫でられながら、今日もお客さんに挨拶を返してスープを渡していく。

具合が悪そうな人を見かけたら、できるだけ声をかけるようにしている。

簡単な薬ならすぐに作れるから後でこっそり中庭まで来て渡しておくのだ。

今日はみんな元気そうだからよかった。

配膳が終わると、あとは昼まで決まった仕事はない。

俺はいつものように中庭の奥にある花壇に行くことにした。

途中でコッコを拾って行くと、薬師のオリオ爺さんがもう薬草の手入れをしていた。

オリオ爺さんに挨拶をして、隣に座って薬草についた虫を一緒にとっていく。

俺とオリオ爺さんの間にちょこんと座っているコッコが、ぱくぱく虫をついばんでいる。

あったかくてのんびりしたこの時間が俺はけっこう好きだ。

曲剣街の宿屋には、薬師や錬金術士などのちょっとした薬を作れる人を従業員として雇っている所が多い。

宿屋自体が抱えている人も多いし、お客さんや品物の競合的な問題で宿屋は色んな区画に点在しているから、病院や診療所を増やすより宿屋に簡単な手当ができる人を置いておく方が色々融通が利くのだ。

そういう理由で風花亭にいる薬師が、このオリオ爺さんだ。

俺よりちよつと大きいくらいの背丈の小さなおじいちゃんは、お髭も髪も真っ白なのんびりした人。

数年前から風花亭で働いているそうだ。

「そつえばの、坊が持ってきた薬草がやっと根付いたんじゃよ」

「えっ、それ本当ですか！」

オリオ爺さんはいつものようにゆっくりキセルを燻らせながらなんでもないように言ったから、俺は思わず握っていた葉っぱを引っこ抜いてしまった。

俺が慌てているのを見てほっほっとオリオ爺さんが笑う。

俺が山で摘んできた薬草はオリオ爺さんに預けていた。

採ってきた薬草の半分くらいは根っこから土を付けて引っこ抜いたから、増やすのは無理だとしても上手くいけば長生きしてくれるんじゃないかと思って。

しかし根付くとは、さすがオリオ爺さん。

年の功ってやっぱり凄い。

「おつとも。ちょいと気難しかったがな、なんとかなりおつたわい。再来年には新しい株ができるかの。お手柄じゃったのう、サナティ」
「よかった。あの薬草ってどれですか？」

目の前の花壇に茂っている緑の中を探してみるけど、あのタンポポみたいなぎざぎざの葉っぱがなかなか見つけれない。

「ここにはおらんよ。あんまり暑い日当はようないんでな。下におる」

どういうことかよく分からなくなつてオリオ爺さんを振り返ると、小さな群青の瞳がやさしく微笑んだ。

「どれ、坊にもそろそろ教えておこうかの。旦那様には内緒じゃぞ？」

ちょうど虫取りも終わったから、オリオ爺さんが立ち上がって裏庭の方へ歩いてく。

俺もコッコを抱えてついていった。

下ってなんだろう。

街はガゼルと一緒に大体探検しつくしたと思っていただけ、まだ俺が行った事のない場所があるみたいだ。

こういうのって、ちよつとどきどきする。

この二年の間に、俺たちは仕事の合間を見つけては色々な場所に行った。

時にはクレアやテッドも連れて裏道でかくれんぼしたり、よく分からない大きなお屋敷を探ってみたり。

でも下っていうことは、地下ってことなのかな？

風花庭にも地下に簡単な酒蔵はあるけど、基本的に曲剣街には地下に大きな施設を作ってるのは見た事がない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5155x/>

勇者はきっとどこにもいない

2011年11月4日01時00分発行